りて大野治房の招に應じて大坂に入り窃かに敵情を探ぐりて家康に以聞す家康嘉みして之を麾下に置く此の役亦た軍功尠なからず既にして軍平らぎ天下一に歸す景憲采邑千五百石を領し御使番と爲る初め景憲甲陽軍鑑を讀みて其の遺缺多きを歎じ常に之を補正せんことを思ふ然れども未だ其の間隙を得ざるを以て遂に果さず是に至りて甲人早川幸豐、廣瀨景房、辻盛昌、小宮山昌久、三科形幸、辻盛次等を招き武田家の兵法を問ひて甲陽軍鑑の遺缺を補ひ大に武田家の兵法を興す故に世人尊びて宗師と爲す又た晩に軍配を岡本宣就赤澤某等に學ぶと云ふ北條氏長山鹿素行等景憲の門に入りて最も著はる寛文三年二月二十五日景憲歿す年九十二凡そ列侯諸士の業を其の門に受くる者無慮二千餘人（北賀文綱、本朝武藝小傳、野史）

ヲバタ サムシラウ 小幡三四郎は幕府に仕へて小從人衆たり人となり曉勇にして技量衆に超え常に自ら義俠を以て任ず曾て其の徒と黨を樹て號して下谷組と曰ふ三四郎之が領袖たり時に太田源藏と云へる者あり本所組の巨魁と爲りて其の名頗る高し三四郎之を惡みて常に除かんことを謀る一日旗亭に相遇ふ三四郎之に決鬪を求む源藏聽ち聽るす三四郎之を家に導き將に擊ちて之を殺さんとす源藏自若として言語常の如し三四郎大に感歎し罪を謝して止む後ち事を以て遠島に處せらる（本朝俠客傳）

ヲバタ シヂム 小畑詩山は儒者なり名は行簡眞隱と號す京都の人江戸に住す明治八年七月四日歿す（名人忌辰錄）

ヲバタ タイシツ 小幡太室（小幡自ら爺しなり名は文華字は君奕、太室は其の號、吉仙と稱す京師の人、旁ら草蘆に學びて詩を善くす太室詩集を著はす（續諸家人物志、醫定便覽）

ヲバタ ニチジヤウ 小幡日淨は武田信虎の臣なり元駿河の人十八歲にして甲斐に往き信綱信虎に歷仕し信虎の長子晴信の傅たり信虎狂暴諫臣を殺し不辜を罪し且つ晴信を除き次子をして嗣がしめんとす日淨等晴信に勸めて曰く父君の狂暴は百姓の怨望する所なり武田氏命運今に挽復せずんば將に危からんとす今君父君の側にあるは父君の怒りを益するものなり宜しく國を出て難を避け旁ら隣國の地理人情を探究し以て後日の參考に供すべし若し不幸にして國亡ぶるも齊桓の故事の如く君歸りて兵を起さば國以て復すべし臣請ふ君を奉じて往かんと天文六年冬遂に晴信を奉じて甲斐を出で三河の山本晴幸を訪ひ此に來る所以を說き晴信を留めんことを請ふ晴幸聽かず孝の道を說きて强て國に還らしむ因て君臣の約をなして別る甲州に歸り傅仕甚だ力む天文九年正月廿一日六十三歲にして歿す（甲陽軍鑑）

ヲバタ ノブサダ 小幡信定（定一に貞）は本名重貞上杉憲政の將なり尾張守と稱し山城守と改む上州國峯の城主なり弟圖書其の城を奪はんと欲す適〻憲政管領の職を長尾謙信に讓る信定謙信と惡きを以て憲政の此舉を誹り併せて謙信を詈る圖書之を謙信に告ぐ謙信怒り同國箕輪の城主長野業政（或は業尙に作る）の信定と善からざるに乘じ之に命じて信定を伐たしむ業政夜驟に城を襲ふ信定驚かず直ちに遯へ遯ちて之を卻く圖書城中にあり固より敵と通ずるを以て敵を導て城に入る信定還るを得ず遁れて甲斐に入り西郡に居る武田晴信之を聞き原滑岩をして召さしむ信定至る晴信之に信濃大日向五千貫の地を賜ひ南目の城を守らしむ後晴信國峯の城を攻る時功あり因て城陷るに及びて之を賜ふ後上總介と稱す初め信定業政の女を娶れり信玄箕輪を攻む長野服せず甲州の兵を拒むこと七年にして城陷り長野氏滅ぶ信玄原內藤二臣を遣はし信定に諭して曰く汝は長野と結婚す而して長野我に叛して滅ぶ汝其の妻を去りて新婚を我家に結ぶ可しと信定曰く我家厚恩を蒙むること泰山を卑しと爲す一身の進退只〻是れ命に隨はんのみ然れども長野滅せざるの間此の命あらば則ち妻を捨てゝ長野に返へす甚だ容易なり今長野滅すれば則ち妻を返すべきの所なし我れ縱

ひ誅に伏すと雖も舊妻を去るの喇に忍ぶ能はすと原、內藤衆を率ゐて小幡の家を圍む信定纔かに一騎にして甲州に到り罪に伏せんことを請ふ信玄曰く小幡は義心の堅きこと此くの如し我素と之を知る故に新附の士と雖も先鋒の列に加へて敢て之を疑はず嘉婿と謂ふ可しと乃ち信定の女を以て武田左馬助に妻はし相共に親睦す天正十年三月織田信長の來りて武田氏を攻むるや信定甲府に抵り織田信忠に見ゆ信忠悅び以て瀧川一益の嚮導となし刀及び諱字を賜ひ今の名に改め請て剃髮す信忠曰く汝ち嘗て武田氏に屬し今我れに歸す忠を抽んずる甫めなり宜く忠甫齊と號すべしと織田氏亡び北條氏に附き文祿元年德川家康に謁す是の冬十一月信濃に卒す子なし弟信秀の子直之を養ひて嗣となし子孫世〻幕府に仕ふ（野史、北賀文綱）

ヲバタ ノブヨ 小幡信世（字は助六、上野の人にして上總介信繁の子なり信世歲甫めて十五にして立身の志を決し乃ち大坂に赴き諸家の風俗を聞見す偶〻知友の石田三成に仕ふる者あり因りて薦舉せられて亦た三成に仕へ小性頭近習を歷て納戸頭と爲り邑二千石を食む信世容貌秀麗にして智勇群に超ゆ關原の戰に敵の爲に圍まれ三成と隔絕し敵を衝き索めて而して得ず遂に石山寺傍に潛匿す時に德川家康大津に次して大に三成を索む是に於て鄉民群聚し信世を擒にし來りて行營に愬ふ乃ち黃金二十枚を土民に賜ひ其の功を賞し遂に信世を召して三成の往く處を鞫問す信世乃ち庭上に跪て曰く某は三成の股肱たり因りて其の往く所を知らざるには非らざれども願くは憐察を垂れよ某多年厚恩に沐浴す而して今や痛苦を脫せんと欲し我に背きて主人の在處を首狀する者に非らざるなり假令ひ骨を碎き身を臠にするとも豈に之を謂はん哉と家康其の忠膽に感じて曰く强て訊鞫すれば則ち勇者の志を奪はんと乃ち縛を解き佩刀を與へて之を放つ是に於て信世直ちに一寺院に入り住持を見て姓字を通じ謂て曰く我れ虜へられて已に死を期したるに不幸にして宥赦を得たり而して吾は生を貪り再び戮辱に逢ふを愧づ因りて自殺して主恩に報ぜんと欲す願くは我が屍を歛めんことをと乃ち自殺す時に歲二十三住持之を行營に聞す家康之を憐惜すと云ふ（野史）

ヲバタ マゴジラウ 小幡孫次郎は武田晴信の臣小幡虎盛の子なり天文十八年四月晴信信濃を攻む虎盛は板垣信里等と小笠原長時を擊つ孫次郎年十六亦從て在り軍酣なるとき敵將丸山筑前守虎盛の陣に近き丘に登りて戰鬪の狀を視るを以て槍を拉て之に向ふ筑前固より勇なり孫次郎傷を被る三所殆と將に危からんとす衆孫次郎を援はんと欲し馬を馳せて來る筑前守之を見て馬首を反して去らんとす孫次郎刀を抽て其の膝を斫る墜つ即ち首を獲て還る晴信感狀を賜ふ（甲陽軍鑑）

ヲハツセワカサ、ギノテムワウ 小泊瀨稚鷦鷯天皇「ヲレツテムワウ」

ヲハマ セイシヨ 小濱清渚は志州の儒者なり名は大海字は子洋樸助と稱す鳥羽藩に仕ふ安政三年歿す年六十四（諸家著述目錄）

ヲバヤシ カジヤウ 小林歌城は和學者なり名は元雄字は子駿、通稱田兵衛一に髮岳堂と號し又た雪衣と號す幕府旗下の世臣なり江戸の番町に住す著書歌城家集あり文久二年二月八日歿す年八十五（撥墓所一覽、名人忌辰錄）

ヲバヤシ ヨシスケ 小林良典は民部大輔に任じ筑前守を兼ね從五位下に叙す應司家の世臣なり主家の緣族なるを以て水戶家の留主居鵜飼喜左衛門父子と親しみ爲に攘夷の勅を申下したるより罪を幕府に受け安政五年午九月十一日梅田雲濱と同時に獄に下され江戶に送らる翌六年八月廿七日遠島に處せらる未た發せさるに病を得十一月十九日歿す（文明史略）

ヲハラ キミヲ 小原君雄は近江の和學者なり篠舍又は鷦鷯舍と號し八郎右衛門と稱す天保八年歿す年八十四（諸家著述目錄）

ヲハラ ケイザム 小原景山は藩人なり京師の人、長崎

に住す性嗇を好みて雜嗇を能くせり(扶桑畸人傳)

ヲハラ　シヤウザイ　小原正在は俳人なり京師の人西武の門人なり(俳林小傳)

ヲハラ　セイイウ　小原正酉は水戸の醫員なり江都の人業を幕府の醫官數原梅塢に受け後水戸藩に仕ふ術大に行はる世に處る澹泊寡慾を以て稱せらる喜びて禪侶と遊ぶ明和三年に歿す(續近世叢語)

ヲハラ　テツシム　小原鐵心は大垣藩の執政なり名は忠寛字は栗卿、二兵衛と稱す鐵心は其の號一に號して是水醉逸と曰ふ父を忠行と曰ふ母は上田氏世〻大垣侯に仕ふ七世の祖忠豐藩祖正眼公に武藏の鯨井の鄕に仕へて功あり藩主封を掘津尼崎に移され尋で大垣に移さるゝに及び亦從ふ忠豐の子忠顯勇敢偉度あり施を好みて善く衆を用ゆ殿堂甚だ崇し職を累ねて城代となる其の子忠珍亦才略あり幕府藩に命じて飛彈の土寇を鎭せしむるに當り忠珍命を承けて往て之を治む日ならずして之を平げ民悅服す今に至て祠を建てゝ祀ると云ふ幕府大に其の功を賞す子孫世〻其の職を嗣ぎ藩の名族たり祿七百五十石を食む曾祖能右功ありて百石を加賜す祖能令事に坐して三百五十石を削らる鐵心天保十三年を以て其の職祿を襲ぎ兼て會計の事を管す居ること二年藩主學事を奬勵するに際し特に鐵心をして其事を擔任せしむ嘉永七年米國の彼理江戸灣に來たるに及び諸侯に命じて之に備へしむ鐵心藩命を受け公族戸田伊豆守を助けて往て備ふ時に詩あり曰く「孤客鞍頭感慨催、海門落日晚潮回、誰知一片武夫恨、戍迹秋寒本牧臺」是より先き國用多端飢饉荐に至る鐵心乃ち私財を散じて窮民を恤む鐵心家に點茶の具數品を藏す鐵心以爲らく碌々敗瓦に似たる物之を藏めて何にかせん當さに之を賣却して飢餓の民を賑すべきなりと終に意を決し錢に換て賑恤の費となせりと云ふ鐵心又議を藩主に献じ租稅の法を改め冗費を省き大に財政を改革す數年ならずして倉廩充實し民其堵に安んずるを得たり文久二年春病あり職を辭して加州の山中に居る冬再たび職に復す明年秋藩侯に從ひ幕府の命を奉じて京師を守る其の詩に曰く「臣節胸間一片存、仰觀天日照=乾坤、熊羆麾下士三百、守護皇宮第一門」と元治元年七月十八日長藩福原越後等の闕を犯すや大垣の兵戍りて賓塔寺にあり鐵心報を得て息忠建高岡三郎兵衞等と兵を三隊に分ち二隊をして沿路の民屋中に伏せ一隊をして進む鐵心急に令して三隊夾み擊ち二時許にして遂に之を却く是の冬武田耕雲齋等兵を率て京に上らんとするの報あり藩侯幕府の命を承け歸りて美濃に備ふ鐵心亦た從ふ詩あり曰く「十年征役若爲情、七入=江都=五帝京、已矣關山殘月裡、白人鬢髮是鷄聲」「軍門雪滿暮蕭々、寒雁啼過旌影飄、奇正中間吾有算、半旬持=戰不=曾挑」「旬餘始出越州地、南到=梁關=朝日輝、忽見彩虹橫=雪峽、官軍一道解圍歸」是より先き安政二年藩侯鐵心の功を賞し祿三百五十石を加賜す鐵心固辭すれども聽かず遂に其の百石を受け二百五十石は以つて年々の公費に充つ是に至て又內外に功あるを以て慶應三年百石を增賜して之れを賞す鐵心固辭して終に受けず明治戊辰の歲大政朝廷に歸し制度畫く革まる廣く人材を諸藩に徵して國事に參せしめ名づけて徵士と曰ふ鐵心其の撰に當り京に入る是の正月三日參與に任ず會〻伏見の事起る藩兵幕府を佐けて其の先驅たり鐵心の子忠迪父の職を襲で藩の參政たり其の中に在り鐵心大に慮き使を馳せて大義を諭す曰く德川內府今日の舉蓋し群小の爲めに誤まらるゝに之れ由る汝何ぞ死を以て直諫せざると既にして事終に及ばず鐵心藩主の順逆を誤らんことを恐れ朝廷に請ひて大垣に馳せ歸り說くに大義を以てし藩主をして上京罪を待たしむ是に於て朝廷藩主に命ずるに東山道の先鋒を以てし功を建てゝ自ら贖はしむ當時諸藩方向を誤まるもの少しとせず而して大垣藩翻然反正して王事に勤むるに至りしものは鐵心の功居多なり是月十七日鐵心會計事務局判事に任じ閏四月二十二日

改めて會計官判事となり從五位に叙す五月十二日兼ねて江戸府判事となる會〻病に罹りて途に上る能はず請ひて其の職を辭せんとす允されず固く請ひて允さるゝを得たり乃ち特に鎧一具を賜ひ副ふるに褒詞を以てし在職中の功績を賞す明年夏朝廷藩兵の屢〻戰功を奏せるを賞して賞祿三萬石を藩主に賜ふ藩主乃ち其の千五十石を鐵心に賜ふ既にして諸藩版籍を奉還し朝廷更に藩主を以て藩知事となす鐵心乃ち大參事に任ず四年正月本保縣權知事に任じ正六位に叙す未だ任に赴かずして免ぜられ大垣藩廳の出仕に補せられ五年四月十五日病て卒す年五十六鐵心人と爲り磊落狀貌魁梧容止嚴正文學を好み齋藤拙堂に從て敎を受く頗る經濟に通ず且つ詩文を善くし旁ら嗇を作る性酒を嗜む嗇て朝廷の宴に侍す上親から大盃を擧げて鐵心に賜ふ鐵心乃ち滿引數盃を盡くす此を以て酒名益〻高し常に梅花を愛し老樹數百を別墅無何有莊に栽ゑて樂む鐵心の祖忠顯老を以て骸骨を乞ふや別墅を城北林村に營して一亭を其中に築き世を謝して閑居し門鑰を鎖して出でざること八年終に老耄世に用ひなきを悟り一日鎧櫃中に入り自刄して死す其の子忠珍亦老を此に養ふ爾後其地廢頹凡そ一百五十年鐵心其の志を繼ぎ之を興さんと欲し林村に至て其の跡を父老に問ふ風踪雲影漠乎として知るべからず乃ち新に一園を購ひ亭を營み號して小夢窩と曰ふ暇あれは則ち客を會して詩を賦し酒を飲みて以て日を鎭す然れとも未だ嘗て宿酲事を廢するが如きことあらず藩主三世に歷仕して屢〻國の多難に遭遇し盡力斡旋功勞多し園藩頗て以て重となす著はす所に錬卒訓語、大船撫要、改革十則等あり皆な藏めて家に在り(近世懷古家列傳)

ヲハラ　ニヘエ　小原仁兵衞「ヲハラテツシム」

ヲハラ　ヒゼムノカミ　小原肥前守は今川氏の部將なり吉田城を守り智勇兼備の士なり德川氏の兵と長澤に戰て功あり其の後諸處に轉戰し最後に花澤の籠城に武田氏の兵に攻められ高天神に走りて遂に討死せり(本朝武功正傳)

ヲハリ　サブラウ　尾張三郎「イシベシカズヨシ」

ヲハリダ　アヅママロ　小墾田東麻呂は和歌を善くして小墾田諸人等と名を齊くし俱に萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其書にあり(萬葉集作者履歷)

ヲハリダ　モロビト　小墾田諸人は天平元年六位を歷て從五位下を授けられ九年散位介となり十年備後守となる十八年從五位下に進み尋で從五位上に至り越中介となる和歌を善くして萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其の書にあり(萬葉集作者履歷)

ヲハリダノミヤニアメノシタシロシメステムワウ　小墾田宮御宇天皇「ス井コテムワウ」

ヲハリ　チウジヤウ　尾張中將「トクガハダヽヨシ」

ヲハリ　ミツトモ　尾張光友「トクガハミツトモ」

ヲハリ　ムラジ　小張連は其の世系を詳びらかにせず或は謂ふ火明命十四世の孫小豐命の後に出づと天平寶龜の間和歌を善くするを以て其の名を著はす秀歌は載せて萬葉集にあり(萬葉集作者履歷)

ヲハリ　ヨシナホ　尾張義直「トクガハヨシナホ」

ヲハリ　ヨクヒ　小張少咋は和銅鑑龜中の人なり和歌を善くし萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其の書にあり(萬葉集作者履歷)

ヲミ　リヨクウ　尾見綠塢は丹後の儒者なり名は忠鵠龜之助と稱す宮津藩に仕ふ慶應二年歿す(諸家著述目錄)

ヲムキヨウヰム　溫恭院「トクガハイヘヨシ」

ヲムコ　溫故は中將棊の名手なり泉州境の人、妙國寺の住持たり朝廷に召され法橋安知と圍棊して兩度の勝を得たり(雜記)

ヲムコサイ　溫故齋「アヲキソウホウ」

ヲムコダウ　溫故堂「ハナハダラウ」

ヨムザム　溫山「カハキタヲムザム」

ヨヤゲ　シゲナガ　小宅重長は藤原朝政の裔なり世〻下野に居る重長清兵衛と稱す永正中其の先亂を避けて往て岩城氏に依り陸奥の人となる曾祖は壹岐祖は新右衛門父は新藏人名は重正永祿三年を以て重長を岩城に生む慶長七年岩城貞隆地を削られて出羽に徙る烏居忠政代りて岩城を鎮す重正留りて之に仕ふ忠政善く父子を遇す同僚に其の能を害せんとする者あり密に重長を殺さんと謀り又を抽て迫まり擊つ重長力鬪して之を斃し仇を常陸に避く時に年二十三仇家は忠政の重臣なり故に忠政に訴へて重長の仕途を禁ず幾ばくもなくして忠政鎖を出羽山縣に移す父重正之に從ふ時に威公新に水戸に封ぜらる執政尾崎閑齋人をして重長に謂はしめて曰く子能く我が君に事へば即ち彼れ之を如何ともするとなし其れ之を擇べと重長喜びて水戸に來る閑齋之を公に薦む忠政果して之を錮すると能はず之を頃らくして公重長を小姓目付となす重長質直にして權貴に阿ねらず學術なしと雖も頗る崇儒を知り言多く理に中る公之を信任し湯藥巾櫛の如きは皆な重長をして之を掌どらしむ蓋し此の時小姓目付は近習に隸す故に班卑しと雖も親近を得公其人となりを熟知し嘗て重長を以て某職となし群下の曲直を察せしめんと欲す重長固辭して受けず公懌ばずして謂ふ汝交誼を重んじて公事を輕んずるにあらざる乎と重長跼蹐として對へて曰く豈に敢て此くの如くならん臣愚事情に達せず恐らくは臧否相反し舉劾當を失して上明君をして嚴酷の名を蒙むり下臣僚をして无妄の禍に罹らしめば即ち臣の罪贖ふ可らず敢て命を拒ばむに非ず臣實に其人に非ざるなりと辭氣激切公之を頷し乃ち止む重長公の左右に給仕すること十五年班秩進まず疾に罹りて水戸に在る數年日に益〻貧窶し遂に骸骨を乞ふ公之を愍みて俸若干を增し以て之を賑はす既にして疾癒ゆ正保二年山手舊邸の留主となる是より常に江戸に在り明暦二年小石川邸に移居し三年歿す年六十八（常實文編）

ヨヤク　シヨサイ　小宅處齋は水戸藩の文學なり名は生順字は安之一の字は坤德、處齋は其の號、重長の子なり幼にして聰悟父と共に水戸侯に仕ふ威公其の成ることあるを度り俸を給し書を賜ひて人見卜幽に就て學ばしむ業日に進む義公之を器とし日に顧問に備へ廩祿二百石を賜ふ嘗て長崎に使して明人に接す此を以て名を知らる義公の朱舜水を得て之に師事したるは處齋の力なり中年に疾を以て廢し延寶二年歿す年三十七（常實文編）

ヨヤマ　ウヂマサ　小山氏政は下野の人なり父秀朝國守たり氏政左衛門佐となる正平七年帝男山に御して將に京師を圖らんとし兒島高德をして東北諸國に赴き兵を起して男山を援けしむ氏政新田宇都宮の氏族と皆な之に應ず而るに男山守を失するを以て遂に果たさず尋で死す（大日本史）

ヨヤマ　イウフウ　小山猷風は春山の子なり常に危行を喜ぶ幼にして氣節太だ其父に肖たり父課するに讀書を以てす然れども之を爲すを屑しとせず槍を揮ひ弓を試みに群兒と戰陣の狀を爲し以て相戲る唯〻忠孝節義の事に於ては甘味を嗜むが如し每に喜びて保建大記靖獻遺言を誦し琅々暗記し畧〻差謬無し聽く者以て後來望み有りと爲す嘗て國家多難外事日に迫るを憂ふ友人某等盟約議を決し時事を幕府に劾論して天下挾復の首唱を爲し大に同志の士を募るに會す一日其父に謂て曰く時迫れり見當さに此れより訣るべし願くば大人復た念と爲す勿れと父も亦其確志移す可らざるを知り乃ち敢て之を留めず置酒行を餞す縱飲淚を揮て去る時に年十八元治甲子四月廿六日なり後ち命を越前に隕すと云ふ猷風詩を能くす才華精爽憂國の慨慷慨の氣凜然として自ら楮表に見はる後其父其稿を上梓して殉難餘響と曰ふ（父莊淺錄）

ヨヤマ　サエモムノジヤウ　小山左衛門尉「チヤマトモマサ」

ヨヤマ　シユムザム　小山春山は詩人なり下野國眞岡の

人なり名は朝弘字は遠士家世〻商を業とし素封を以て著はる而して春山幼より沈深大志あり牙籤を執て末利を爭ふを欲せず唯書を讀み道を講じ以て古人を友とするを樂む常に蒲生君平高山仲繩の人と爲りを慕ひ太く王室の衰微を慨嘆し窃に之を挽回せんとするの志あり弱冠にして水戸會澤正志の塾に入り經史を研鑽し傍ら藤田東湖豐田松岡等の諸名流に交はる後ち江戸に遊び幕醫尾臺良作の門に入り醫術を研究し且つ藤森天山に從ひ漢文を修め雄篇鉅作筆に從て就る天山其逸才を愛し賞讃措かず是の時に當て幕府元老井伊直弼專横を極め終に刺客の爲に斃さる而して安藤對馬守尙直弼の遺意を承け益〻苛政を行ふ春山之れを憤慨し同志の士と竊かに之を害せんと謀る既にして同盟の士小田彦次郎等對馬守を江戸坂下門外に要擊するや春山亦た捕はれて鄉獄に繫かる是れ實に文久二年正月廿九日なりき二月江戸に押送せられ傳馬町の獄舍に入る春山屈する所なく言笑自若放吟高歌適〻文天祥の指南錄に感じ自ら詩數百首を賦し名けて留丹稿と云ふ八月釋されて鄉に歸ることを得たり元治元年水戸藩士藤田小四郎等の兵を筑波山に擧ぐるや春山も亦た與かる所あり故に其の敗るゝや幕吏に捕はれて佃島に竄せらる時に横濱の人高島嘉右衛門も亦獄を同うし深く春山の學德を喜び就て易學を切磋せしと云ふ春山後ち赦されて家に歸るや月夕花晨徜徉自適曾て餘念あるとなし而して明治維新の始め日光縣知事鍋島道太郎春山を招き以て撫民の要を諮ふ是に於て春山も亦其己を知るに感じ贊襄する所尠からず明治元年十一月朝廷特に徵して史官試補となす翌年八月大宮縣權大參事に轉じ後司法大藏の二省に歷任し明治二十四年一月一日病歿す齡六十五

ヨヤマダ　イツカム　小山田一閑は赤穗藩の士なり既に致仕し薙髮して一閑と號す城主淺野長矩滅して後ち江戸に來り女家に依る其の子庄左衛門復仇の盟に預るを以て心竊に自ら喜ぶ衆既に仇を復す一閑其の子の節に逃るゝを聞き自殺す時に年八十一（報讐錄）

ヨヤマ　クカモロ　小山高師は源五左衛門と稱す淺野長矩の重臣にして大石良雄の伯父たり初め義を唱へしも中比より志を變じ却て良雄の擧を非とす復讐の後落北に潛み名を鳥居休澤と改め面目を世間に失し正德五年九月四日六十八歲にして歿す紫野瑞光院義士墳墓の側に葬る（瑞光院過去帳）

ヨヤマダ・クカイヘ　小山田高家は太郎と稱す何許の人たるを詳かにせず延元元年新田義貞に從ひて播磨に抵り赤松則村を白旗城に圍む春より夏に至る軍糧食に乏し義貞兵士の暴掠せんことを慮りて街每に榜に署して曰く敢て一穗を刈り一屋を侵す者は法に處せんと是を以て農、耕を釋てず商、肆を易へず高家令を犯して麥を刈る軍吏罪を論ず斬に當る義貞曰く彼れ豈に敢て身を以て麥に易へんや無乃敵地に生ずる所なるを以て誤りて吾令の限りに非ずとなす乎然らざれば糧食匱乏にして已むを得ず法を犯すならんと人を遣はして視撿せしむ馬仗盛んに設けて芻糧纍如たり義貞愧づる色あり曰く彼の食を求むるは將に以て職に力めんとするなり而して士卒先づ饑ゆるは將の恥なり勇士は失す可らず法も亦た濫る可らずと衣二襲を遣りて其の田主に償ひ高家に糧米十斛を給して之を謝す既にして義貞足利尊氏と兵庫に戰ひて敗走し馬、矢に中りて僵る路傍の塚上に上りて副騎の至るを竢つ敵競ひ集りて之を圍む高家馳せ至りて乘る所の馬を以て義貞に授け力戰して死す義貞賴りて脫することを得たり（大日本史）

ヨヤマダ　トモキヨ　小山田與清は和學者なり初の名は貴長、通稱六郎左衛門、後改めて將曹と曰ひ又外記と呼べり字は文儒、松屋は其號、又知非齋と號せり初の號は玉河亭樂山堂又別號を報恩舍と云ふ天明三年三月十七日武藏國多摩郡小山田村に生る父は田中孝字は笠父、號を添水園と曰へり與清生れて母を亡ふ老媪代りて育ふ長ずるに及んで其恩を忘れざりしと云ふ享和三年高田氏の養子と爲り庄次郎後に正二郎

と改め江戸神田河邊なる家に住めり和學を村田春海に學び清水濱臣等と共に其高足たり文政九年病あり孫清常を立て高田を繼がしめ遠祖の姓小山田氏に復しぬ與清幼より學を好み日夜勤勉倦むこと無かりしかば後終に大成することを得て學古今を窮め和漢に通ぜり藤田東湖嘗て著す所松屋外集に題して曰く「典籍網羅五萬卷、議論上下三千年、古今學者知多少、該博如君有幾人」と尊ら力を考證に盡して此道に偉功有ること普ねく世人の知る所なり之に關する著述甚だ多きが中に群書搜索目錄は最も精を盡したる者にして自らも「予有群書索搜目錄之學也、其勞既三十年、有未爲一日之助者焉、云々」といへり文政文化の頃德川文學の旺盛なるに當り嚴然一方に門戸を作し平田篤胤、伴信友等と共に春海、千蔭以後の三大家と稱せられたり當時四方の名士皆之と交結して往來繁げかりき大窪詩佛、太田錦城、藤田東湖、立原翠軒、立原杏所、岸本由豆流、屋代弘賢、北靜廬、村田了阿、谷文晁、太田南畝、成島司直、山東京傳、京山兄弟等皆深交あり天下其名を慕ひ來て其門に遊ぶ者甚だ多く門下數百名の多きに達せり就中鶴峯戊申、間宮永好、鈴木基之、猿渡盛章、猿渡容盛、田沼善一、伊能穎則、鈴木雅之、北條時鄰、佐藤信古、澁山知之、橘本好秋、椿仲輔、西野宣明等は其重なる者なり諸侯にして敎を乞へるもの阿州、對州、平戸の諸藩主あり與清素と出て仕ふるを好まざりしが水戸烈公深く其名を慕ひ家臣富岡利久、久米博高をして其門に入らしめ後史館に出仕せしめ古典を講じ詠草を添刪せしめぬ此間命に依り扶桑拾葉集を註釋し又八洲文藻一百二十卷を撰して奉れり斯くして水戸藩中漸く其學風に歸せる者多かりしと云ふ其後華頂宮尊超親王京より下り三條山に留學し給へる折屢〻御前に召されて講筵を開き恩遇殊に厚かりしが遂に御臣の列に加へ給ひ後特に擢て大夫の後に從はしめ世稱を外記と賜へり與清藏する所の書甚だ多く當時都下第一と稱せられたり擁書樓は其書庫なり積む所凡そ五萬卷此樓の成るや四方の文人學士爭ふて詩歌を寄せて其落成を祝しぬ當時屋代弘賢と共に藏書家を以て稱せらる弘化四年病に罹り其起たざるを知り藏書の大半を水戸侯に獻納せり今尙ほ水戸の彰考館中に保存すといふ同三月廿五日逝く辭世の歌に曰く「くづるべき時は來にけりつきなせしまなびの山もふみの高嶺も」

ヨヤマダ　ノブシゲ　小山田信茂は備中守と稱す天文九年正月武田晴信兵士八千を帥ゐ信州海尻を攻む當城は村上より援師寺右近進多治見太兵衛小沼舍人介をして守らしむ板垣信形使者を以て言はしめて曰く若し退城せは戈を接ふるに及はすと城中敵しがたきを察し其意に應して開城す晴信之を守らしむるに板垣飯富小山田甘利を以てす村上義清此れを聞て清野井上隅田高梨等八百餘人不意に起つて當城を攻む當城の目付長坂左衛門應病なるを以て大いに恐れ小山田日向に會議し一時退城して甲府に歸らんとす小山田艶然として曰く縱百萬の强敵といへとも一戰に及はすして城を渡すべきや各〻は隨意にせられよ此信茂は不肖なれとも城代の任あり死を以て守らんとす長坂曰く御邊は斯猛剛の言を發するも大軍に圍まれ援兵無くんは落城すへし因て我は一方を脫て早く甲府に歸り援を乞ふべしとて退城す日向は一里許り長坂を送り又引返し城に入らんとすれとも鄕民四方を圍み敢て入る事を得す遂に海野口城に入り小宮山丹後守と一手に成て晴信の出陣を待つ甲府には疾く此由を聞き晴信即時に後詰の命を促し自ら將として行〻兵を募り海野口に着す信茂は一手の勢僅五十餘人必死に成て防戰三日援兵の至るに逢ひ大に勢威を得敵遂に敗走す晴信信茂の忠勇を賞し即ち感狀を賜ひ長坂を追放す後ち年を經て信茂は信州高遠の城に移る當城は勝頼の弟仁科薩摩守此れを守りしに天正十年織田の大軍甲信に亂入し當城に攻掛り織田信忠より先つ書簡を贈り降を勸む仁科諸士を集め書簡を出して諸將の意を聞かんとす信茂曰く大事爰に極れり

今己に命を拋て累代の恩を報ゆる時なり然れば當城を枕となし戰死すべし他人は知らす信茂は一足も去らす必死を究むと諸士も此一言に勵まされて悉く同意せり仁科大に悅び姑らく諸君の意中を試むるのみと頓て返簡を贈て我等一旦君命を受け當城を守れり何そ貳心を生すへき早く攻寄せよと織田氏怒つて大軍を以て圍む城兵都て五百餘人最期の宴を催し信茂一番に城門を開て突戰し首數級を獲て遂に陣歿せり信茂の弟大學は一方を切拔け勝頼に從ひ天目山に討死す(新皮錄)

ヨヤマダ　ヤイチ　小山田彌市は江戸の人なり幕府に仕へて先手同心たり性頗る粗暴にして常に爭鬪を好み白柄組の徒に入りて市中を横行す嘗て小河原五郎兵衛の女を娶らんと欲す五郎兵衛其の無狀なるを惡みて聽るさず事遂に止む既にして其の女幕府に入る一日彌市黨魁水野十郎左衛門の家に造り其の徒數人と宴飲し談偶〻其の女の事に及ぶ十郎左衛門聞て悅こばずして曰く子は男子に非ず向後復た足を我門に容るゝ莫れと彌市大に之を恥ぢ即ち起ちて戶外に出づ之を頃らくして一首級を提げ來る鮮血尙ほ淋漓たり彌市之を坐中に置き乃ち謂て曰く是は此れ小河原五郎兵衛の首なり卿尙ほ僕を目して男子に非ずとなす乎と十郎左衛門見て微笑して謂て曰く卿は眞に男子なりと既にして事幕府に聞え逮捕すると頗る急なり是に於て彌市身を邊陬に隱くす後ち逮捕の稍〻緩慢なるを度りて江戸に還り一日嘗故と舟を墨陀に浮ぶ捕吏忽ち來りて之を縛し遂に磔刑に處せらる時に年四十事は慶安中に在り(本朝俠客傳)

ヨヤマ　トモサト　小山朝鄕は朝政の裔なり父は秀朝下野守たり朝鄕少にして今犬丸と名づけ幼にして家を繼ぐ足利尊氏の反するや朝鄕之に從ひて功あり左衛門尉と爲る延元中官軍の爲めに虜せられ將に刑せられんとす結城宗廣其の宗族たるを以て請ひて吾隊中に拘ふ後國に還り復た尊氏に黨す源親房の常陸に在る近國の將士を招き致す朝鄕歸順の意あり將に之に應ぜんとす然れども尙ほ觀望を懷きて遂に果たさず早く死す(大日本史)

ヨヤマ　トモマサ　小山朝政は小四郎と稱す下野の人藤原秀鄕の裔なり祖は行政父は政光小山四郎と稱し下野大掾と爲る朝政足利忠綱と宗を同くし俱に州豪を以て相軋る以仁王令を下して平氏を討たしむ朝政將に應ぜんとして忠綱に告く聽かず信太義廣頼朝を援はんと圖り兵を率ゐて下野に入り朝政及忠綱を誘ふ忠綱之に應ず朝政逆へて之を擊たんとす會〻父政光京師に宿衛して居守單弱なり因て乃ち詐り聽るす義廣來りて軍事を議するに及び密に兵を率ゐ出でゝ野木社に屯し伏を林業に設けて以て待つ義廣社前を過ぐ伏起りて樹に升り亂呼す壁溪谷に震ふ義廣其の衆寡を測らず軍大に驚擾す朝政之に乘じて奮擊す殺傷頗る多し義廣射て朝政に中つ馬より墜ち殆ど死せんとす會〻弟宗政來り救ふ義廣退て社の西南に屯し朝政宗政と合して之を擊つ適〻驟風大に起り砂石目を眯ます義廣の兵復た戰ふこと能はず遂に逃散す朝政乃ち捷を鎌倉に報ず頼朝義廣黨の食邑を沒して朝政に常陸村田下莊の地頭職を授け殊に書を賜ひて其の功を賞す壽永三年源範頼に從ひて平氏を一谷に討ち尋で從ひて西海に至る軍中食乏ぼし將士多く東歸を思ふ獨り朝政宗政千葉常胤等と能く艱苦を忍びて銳意攻戰す頼朝手書を下して之を褒む源義經薦めて兵衛尉と爲す文治中藤原泰衡を征するに從ふ泰衡敗走す朝政往て物見岡を搜ぐるに泰衡已に逃る朝政等其の留むる所の兵と戰ひて之を殲くす明年頼朝に從ひて京師に朝す將士に殊功ある者を擧げて任官せしむ朝政を以て右衛門尉と爲す尋で左衛門尉檢非違使に任じ從五位下に叙せられ下野守と爲る正治元年播磨守護と爲る建仁の初め京師に宿衛す車駕法皇に觀す朝政之に從ふ會〻越後の人城長茂叛を謀り兵を以て寓舍を圍む朝政の家士拒ぎて之を卻く既にして還りて鎌倉に居る比企能員北條氏を滅せんと圖るに及び朝政二弟及び畠山重忠等と擊て之を

平らぐ人あり宇都宮頼綱叛を謀ると譖す實頼特に朝政に命じ兵に將として往て之を誅せしむ朝政曰く頼綱は臣と外戚の親あり然れども私を捨てゝ公に從はん其の防戰の如きは豈に力を盡くさざらんや但こ專はら使命に當るは實に忍びざる所敢て辭すと乃ち密かに狀を以て頼綱を諭す頼綱困て陳謝して免るゝを得たり承久の役に朝政耆蕾を以て鎌倉に留り軍謀を參決し兵士を調遣す曆仁元年卒す年八十四是より先き剃髪して生西と法名す(大日本史)

ヲヤマ ヒデトモ 小山秀朝は下野の人、朝政七世の孫なり初の名は高朝、大夫判官と稱す元弘中北條氏の軍に從て笠置及び楠正成の城を攻む新田義貞義軍を起すに及び秀朝出でゝ之に屬し金澤貞將を鶴見に破ぶり俱に進みて鎌倉を攻めて之に克ち尋で下野守と爲る建武二年北條時行の軍を武藏府に拒ぎ克たずして之に死す(大日本史)

ヲヤマ マサタ子 小山政種は字は小四郎、下野の人、義政と同祖なり祖父を高明と云ふ下野守と稱す父秀綱は彈正少弼と稱す永祿五年三月上杉謙信軍を進めて秀綱を祇園城に攻む此地たる東は前門北は後門にして平地と雖も湟堅三重あり西南は懸崖高く聳え入憶川を堰き守禦兵亦遜なからす上野の國人謙信に屬し城に薄りて攻むると急なり秀綱の弟富岡重朝謀りて成を行ひ政種を送て質と爲す謙信園を解く謙信歿するに及び政種北條氏に屬す天正十八年小田原城に入りて秀吉を拒ぐ城陷りて後ち降を秀吉に乞ふ秀吉聽かず乃ち祇園城を棄てゝ那須邊に潛居す蒲生氏鄉會津を領すと聞き赴て之に賴る氏鄉祖先同胞の親となし食祿千石を與へ成田氏長の女婿となし中山城を保たしむ是の時政種歷世傳ふる處の旗幕を悉く氏鄉に讓與す蒲生氏初め翔鶴及び松皮菱を以て記號と爲せり然れども是より後ち三頭左巴を用ひしと云ふ是より先き猪苗代兼載聯歌を學び古河に遊ふ政種之を迎ふ天文十四年春政種宴を張り興に乘じ拳を揚げて兼載の頭を扣き戲れて曰く「けむさいつむり春風ぞふく」兼載色を作して曰く「をやまきの拳の花はちり果てゝ」と(野史)

ヲヤマ ヤウクワイ 小山養快は大坂の和學者なり名は儀字は伯鳳と號す好むで和漢の書を讀み獨得の卓見を以て一家をなせり世に竹取物語の注釋なきを慨き一書を著す名けて竹取物語抄と云ふ稿成て校訂を親戚なる入江昌喜に托す未だをはらず儀中途にして卒す年二十五(卒せし年代を詳かにせず竹取物語抄の脫稿して上木せしは天明四年四月なり天明三年に伯鳳の弟翔が書せる竹取物語抄の跋に伯氏即世翼亦尋逝今也數年而其書全成云々の文あるを以て考ふれば其歿せしは安永の末頃なるべし(竹取物語抄序、古學道統)

ヲヤマ ヨシマサ 小山義政は下野の人朝政九世の孫なり曩祖秀鄉は國に著勳ありて子孫名族たり小山氏は其の宗たり祖は秀朝父は氏政左衛門佐たり義政左馬助となり下野守に任せらる天授六年義政兵を起して官軍に應ず宇都宮基綱來たり攻む義政逆へ擊ちて之を裴原に斬る是に於て足利氏滿上杉憲方を遣はして義政を攻めしむ義政禦ぎ戰ひて利あらず使を遣はして降を請ふ氏滿之を聽るす既にして義政降を果たさず弘和元年春氏滿亦た上杉朝宗等をして來り攻めしむ義政驚城に據りて之を禦ぐ白旗の一隊衆に先ちて進み攻めて外郭を破ぶる義政衆を勵げまし奮擊して之を卻く殺傷甚だ多し相持すること數月義政或は伏を設けて敵の糧道を絕ち或は火を放ちて敵營を燒く朝宗等士卒をして艸を運びて隍を塡めしめ因て之を攻む義政亦兵を出して之を禦ぐ敵多く創を破りて敗ぶれて退く冬に至りて城中糧殆んと盡きて亦た後援なし義政僧を使にして降を請ひ且つ曰く君幸ひに僕の請ふ所を聽るさば則ち僕薙髪して僧となり家務を子若犬丸に付與せんと氏滿又た之を聽るす是に於て義政驚城を去り之を朝宗に付し衆を率ゐて祇園城に徙り遂に薙髪し名を改めて永賢と曰ふ氏滿素より義政の降を信ぜず故を以て速かに解き去らず明年に至りて義政自ら祇園城を火きて糟尾山中に入り險に據り壘を爲りて之を櫃澤城と曰ふ士卒を長野寺窪城に分遣して之を守らしむ氏滿憤りて曰く我屢こ義政の爲めに紿かる今我れ義政の首を視ざれば敢て師を旋へさざるなりと復た上杉朝宗木戸修理亮國兵を發して義政を攻めしむ甚はだ急なり白旗一隊其の先鋒と爲りて長野城を攻めて之を陷る尋で亦寺窪城を陷る明日諸軍並びに進みて櫃澤城を攻む義政軍敗ぶれて復た戰ふ可らず父子夜に乘じて逃る敵兵追及す義政自殺す若犬丸間に乘じて亡げ去る(大日本史)

ヲヤマ ワカイヌマル 小山若犬丸は下野の人、義政の子なり弘和中父義政驚城に據りて兵を擧ぐ足利氏滿上杉朝宗等を遣して來り攻めしむ城中糧盡きて欵を納る氏滿之を聽るす義政髪を削りて祇園城に入り若犬丸をして家を繼がしむ既にして復叛して櫃澤城に據る氏滿怒り大兵を率ゐて來り攻む若犬丸父と俱に拒ぎ戰ひて大に敗ぶれ父子夜に乘じて逃がる明日敵兵追及す義政自殺す若犬丸間に乘じて亡げ走る元中三年若犬丸祇園城に據りて兵を起す守護代木戸修理亮國兵を發し來りて不可惠山に陣す若犬丸襲擊して之を走らす足利氏滿復た自ら兵を率ゐて下總に至り古河城に陣す若犬丸其の勢敵し難きを察し城を棄てゝ逃がる氏滿國中に令して之を索めしむ得ず自後若犬丸轉移常なし應永三年陸奥に至り密かに嘗て勤王せる子姪を招聚し因て以て義を擧げんと圖かる田村莊司坂上清兼之に應ず是より先き新田義宗の子義則匿れて陸奥に在り若犬丸清兼と議し義則を立てゝ將と爲し義を近國に唱ふ武藏上野の義徒盡く至る若犬丸乃ち義則清兼と其の兵を領し出でゝ將に白河關に至らんとす足利氏滿自ら關東十國の兵を督して白河に至る若犬丸等終に敵す可らざるを知りて自ら潰え去る後ち終はる所を知らず(大日本史)

ヲユミゴシヨ 小弓御所「アシカゞヨシアキ」

ヲロシ ミツマサ 下石三正は實藏院流下石流の槍術の祖なり平右衛門と稱す初め山田瀨兵衛と號す松平忠明に仕ふ郡山侯實藏院胤舜の門人なり後白川侯松平直矩に仕へて五百石を食む晩年致仕して江戸に居り道二と號して槍法を教授す(武術流祖錄)

大日本人名辭書下卷終

大日本人名辭書上卷正誤

醫家系譜第五〇頁	後藤良山ハ　後藤艮山	
俳家系譜第九八頁	松永貞徳の弟子　萩野安靜ハ　荻野	
	岡田宗利ハ　高田宗利	
九九	立甫の系　澤田友健ハ　由健	
同	重頼の系　櫻井貞山ハ　重山	
一〇〇	介徳の系　服部常春の下志水返滑ハ延滑	
一〇一	未得の系　立羽不角の三男蕉角は　二男	
一〇二	良保の系　滑口竹亮ハ　竹亭	
一〇三	素堂の系　橋本三曉を十世今日庵とあるハ其日庵	
一〇四	宗因の系　西山宗春の下に一線あるは衍	
一〇五	芭蕉の系　宮崎刑口ハ　荆口	
同	同　相良等躬ハ等躬	
一〇九	涼菟の系　谷川護物の下初闌更門ハ士朗門	
本文 二四四	一雪の傳「椋梨又は」ハ椋梨氏の誤	
三〇八	般富門院の傳「アキコナイシムウ」にありとせるはリヤウシの誤	
四〇九	阿茶局の傳「チヤノツボヂ重田」ハ衍	
四九六	大庭景久ノ傳　服部五郎ハ　股野五郎	
五六一	片山北海の傳　名ハ猷ハ　猷	
六〇六	狩野舜水ハ　舜川	
七四三	者陽の傳「ミヤクキヤウ」にありとせるは「ミクキヤウの誤	
七五八	山翠「スガヌマキヨクスヰ」の一行ハ衍	
同	曲翠の傳「菅沼氏外祀と稱す」を脱す	
七七七	愚溪「ヲヤウケイ」ハ「ヲヤウエ」	
八一三	君山「マツダヒラクムザム」ハ「マツモト」	
八三二	鼎船忠右衛門「チノシブウエモム」の一行脱	
一〇〇一	坂部正家の傳の前一行の文字は悉く衍	
一〇四三	燕興園顯千ハ　千顯	
一〇八三	澤井志津磨の傳　齋家ハ　齋家	
一一〇二	ヲウム慈雲「メウイ」の一行脱	
一二八〇	新平門院ハ　新朔平門院	
一二一一	尚白の傳「エサシヤウハク」を見よの數字脱	

大日本人名辭書下卷正誤

本文　二〇頁　道性の傳　弘安九年生る二字衍

二一三　道設の傳「ヲノダウセツ」を見よは「ヒトミボウサイ」の誤

一三四　田中大秀の傳　八月滿は月滿

一九三　知空の傳　壬生等は寺

一九九　知足の傳「叔照庵又垣麻亭と號す」は「叔照庵又蝸廬亭と號す姓は千代倉渤左衛門」

二〇六　茅原虚齋の傳　左衛は左衛

二一四　左の二行を脱す

チヤチヤ　茶々「ヨドギミ」

チヤノツボ子　茶之局「オチヤノツボネ」

二三二　『チヨノウ　千代能「クイアイ」』の一行脱

二三三　『ツウチ　ヂヘエ　津打治兵衛「ドムツウヨサウベエ」』の一行脱

三六三　徳源の傳「コウホトクゲム」にありとせるは「カウホ」の誤

三九二　富屋似船は富尾

四四四　中島雪櫻の傳　字は潛史は潛叟又た雪梅詩集は雪櫻詩集

四八六　永井英賀は英賢の誤なり當に長井東原に併すべし

五九六　禮子内親王の傳　鳥羽天皇第二の皇女は後鳥羽

八九七　『フマイ　不昧「マツダヒラハルサト」』の一行脱

大日本人名辭書補遺

アカシ　ジラウ　明石次郎は越後縮布の元祖なり名は將俊、本姓は堀といふ、播州明石の士なり寛文年中越後北魚沼郡山谷村に移り後幾くもなく小千谷町に抵り當時の豪家中町清兵衛の家に寓す妻を繩と呼ぶ二子あり長を袈裟といひ次を千代といふ皆次郎の伴ひ來れるなり次郎固と學識ありて紡織の術に精しく二女亦才あり乗て絲竹の道に通ず乃ち父母の命を請けて苧麻を以て布を織り斑文をあやどり縞ちゞを施すことを發明し近隣の子女を集めて其業を授く後一家を擕ふ日を追ふて其業益ゝ擴まる延寳七年九月廿日次郎歿す同町極樂寺に葬る今尚同寺に一小碑あり記する處唯年號と戒名とのみ越後縮布の名聲漸く盛なるに及び人民其餘德を欽慕し一堂を建立して其靈を祭り號して明石神社といふ蓋越後布の製は既に鎌倉以前にありしと雖も當時の越後布は唯ゝ苧麻を用ひたるのみにして普通の布と異なることなし次郎等來りて更に之に意匠を加へ或は斑文を織出し或は縞を施して始て今日の越後縮布を創せり次郎歿して後長女に聟を迎へて相續せしむ其家尚ほ存せりといふ傳へ云ふ今日越後の坊間歌ふ處のおけさ節なるもの蓋し長女袈裟の歌ひしものなりといふ（柏崎町小竹忠三郎報）

イムドウ　ゲムトク　印東玄得は醫學士なり紀州新宮の人本姓坪井氏後印東氏を繼ぐ鄉に在て醫を學び後東京に出で大學東校に入る明治十二年卒業し病院を建て病者を療す門に踵る者頗る多く名京濱の間に嚮し嘗て阿部泰造と謀り明治生命保險會社を創す我邦保險醫の破天荒たり二十八年十一月廿五日歿す年四十六

カウセム　洪川は禪僧なり今北氏鎌倉圓覺寺に住し臨濟宗の管長たり由理滴水荻野獨園と當時臨濟派の三傑と稱せらる學士文人其の教を請ふ者多し詩文に長し著す所禪海一瀾あり明治二十七年寂す年七十餘

カハカミ　ヒロキ　川上廣樹は漢學者なり兼て國學に長し歌を詠ず春山と號す下野足利の人本姓は中村幼名は八十吉後才輔と改む年二十三川上氏を繼ぎ藩主戸田氏に仕へて監察側用人に歷任し老職となる藩政を釐革し治績大に舉る元治慶應の際幕府政を失し海内多事なり此時に當り本藩の政務を統轄し四隣に應接し善く中外の盤錯を剖析して餘裕あるがごとし園藩倚頼す王政維新に及ひ足利藩大參事に任せらる明治四年藩廢せられ栃木縣に屬す十五年足利郡小俣村に退隱す十八年八月修史館に出仕す十九年一月罷め英語學校郁文館淨土宗學校等の聘に應じ經史を説く學徒日に進む經濟雜誌社の社會事彙を編纂するや之か修撰の任に當る二十八年十二月二日病で歿す年五十七廣樹幼にして書を好み漢文を日尾荊山に學び國文を中條某に受く著す所足利學校事蹟考、語學入門等數種あり

カハダ　アウカウ　川田甕江は儒者なり名は剛は字は毅卿幼名竹次郎後城三郎と改む備中松山藩士（維新後高梁藩と改む）にして天保元年六月を以て生る幼より穎悟年稍ゝ長し贅を同國の碩儒山田方谷の門に執り屹々業を修め經史百家窺はざるなし衆推して秀才となす後東遊を命せられて昌平校に入り又藤森天山に學ぶ幾くならずして召還され藩の重職に擢でらる明治戊辰正月伏見鳥羽の變起る藩主德川氏の親近なるを以て忽ち官軍の攻むる所となり社稷將に危からんとす即ち身を脱して私に京師に入り陳情百回爰に於て嫌疑氷解し藩主をして百世に廟食するを得せしむ維新後召されて大學博士に任せられ帷を城北牛込に下して子弟に教へ門下又知名の士を出す尠からず後宮内省四等出仕より諸陵頭東宮御用掛に累遷し貴族院議員に勅選し文學博士の稱號を授けられ學士會員に列す漢文學の大家として中外に尊敬せらる明治二十九年二月一日正四位勳

大日本人名辭書下卷正誤

本文、二〇頁　道性の傳　弘安九年生る二字衍

二二　道設の傳「チノダウセツ」と見よは「トミボウサイ」の誤

二三四　田中大秀の傳　八月滿は月滿

一九三　知空の傳　壬生等は寺

一九九　知足の傳「叔照庵又垣廉亭と號す」は「叔照庵又蝸廉亭と號す姓は千代倉勘左衛門」

二〇六　茅原虛齋の傳　玄帝は玄常

二二四　左の二行を脫す

チヤチヤ　茶々「ヨドギミ」

チヤノツボ子　茶之局「オチヤノツボネ」

二三二　「チヨノウ　千代能「ゲイノオ」」の二行脫

二三三　「ツウチ　ヂヘエ　津打治兵衛「ツウチムヂウヨウヘエ」」の二行脫

二六三　德源の傳「ユウホトクゲン」にありとせるは「カウゲンの誤

三九二　富屋似船は富尾

四四四　中島雪樓の傳　字は潛史は潛叟又た雪樓詩集は雪樓詩集

四八六　永井英賢は英賢の誤なり當に長井東原に併すべし

五九六　淩于內親王の傳　烏羽天皇第二の皇女は後鳥羽

八九七　「ウマイ　不味「マヅシ」ルサト」の二行脫

大日本人名辭書補遺

アカシ　ジラウ　明石次郎は越後縮布の元祖なり名は將俊、本姓は堀といふ、播州明石の士なり寛文年中越後北魚沼郡山谷村に移り後幾くもなく小千谷町に抵り當時の豪家中町清兵衛の家に寓す妻を繩と呼ぶ二子あり長を袈裟といひ次を千代といふ曾次郎の伴ひ來れるなり次郎固と學識ありて紡織の術に精しく二女亦才あり兼て紵竹の道に通ず乃ち父母の命を請けて苧麻を以て布を織り斑文をあやどり綿ちゞを施すことを發明し近隣の子女を集めて其業を授く後一家を携ふ日を追ふて其業益〻擴まる延寶七年九月廿日次郎歿す同町極樂寺に葬る今尚同寺に一小碑あり記する處唯年號と戒名とのみ越後縮布の名盛漸く盛なるに及び人民其餘德を欽慕し一堂を建立して其靈を祭り號して明石神社といふ蓋越後布の製は既に鎌倉以前にありしと雖も當時の越後布は唯〻苧麻を用ひたるのみにして普通の布と異なることなし次郎等來りて更に之に意匠を加へ或は斑文を織出し或は縞を施して始て今日の越後縮布を創せり次郎歿して後長女に聟を迎へて相續せしむ其家尚ほ存せりといふ俗へ云ふ今日越後の坊間歌ふ處のおけさ節なるもの蓋し長女袈裟の歌ひしものなりといふ（柏崎町小竹忍三郎報）

イムドウ　ゲムトク　印東玄得は醫學士なり紀州新宮の人本姓坪井氏後印東氏を繼ぐ鄉に在て醫を學び後東京に出で大學東校に入る明治十二年卒業し病院を建て病者を療す門に雲集る者頗る多く名京濱の間に聞し嘗て阿部泰造と謀り明治生命保險會社を創す我邦保險醫の破天荒たり二十八年十一月廿五日歿す年四十六

カウセム　洪川は禪僧なり今北氏鎌倉圓覺寺に住し臨濟宗の管長たり由理滴水荻野獨園と當時臨濟派の三傑と稱せらるる學士文人其の教を聞ふ者多し詩文に長し著す所禪海一瀾あり明治二十七年寂す年七十餘

カハカミ　ヒロキ　川上廣樹は漢學者なり兼て國學に長し歌を詠ず春山と號す下野足利の人本姓は中村幼名は八十吉後才輔と改む年二十三川上氏を嗣ぎ藩主戸田氏に仕へて監察側用人に歷任し老職となる藩政を釐革し治績大に擧る元治慶應の際幕府政を失し海內多事なり此時に當り本藩の政務を統轄し四隣に應接し善く中外の盤錯を剖析して餘裕あるがごとし國藩倚賴す王政維新に及ひ足利藩大參事に任せらる明治四年藩廢せられ栃木縣に屬す十五年足利郡小俣村に退隱す十八年八月修史館に出仕す十九年一月罷め英語學校彌文館淨土宗學校等の聘に應じ經史を說く學徒日に進む經濟雜誌社の社會事彙を編纂するや之か修撰の任に當る二十八年十二月二日病で歿す年五十七廣樹幼にして書を好み漢文を日尾荊山に學び國文を中條某に受く著す所足利學校事蹟考、語學入門等數種あり

カハダ　アウカウ　川田甕江は儒者なり名は剛は字は毅卿幼名竹次郎後城三郎と改む備中松山藩士（維新後高梁藩と改む）にして天保元年六月を以て生る幼より穎悟年稍〻長し贄を同國の碩儒山田方谷の門に執り屹々業を修め經史百家窺はざるなし衆推して秀才となす後東遊を命せられて昌平校に入り又藤森天山に學ぶ幾くならずして召還され藩の重職に擢でらる明治戊辰正月伏見鳥羽の變起る藩主德川氏の親近なるを以て忽ち官軍の攻むる所となり社稷將に危からんとす即ち身を脫して私に京師に入り陳情百回爰に於て嫌疑氷解し藩主をして百世に廟食するを得せしむ維新後召されて大學博士に任せられ帷を城北牛込に下して子弟に教へ門下又知名の士を出す少からず後宮內省四等出仕より諸陵頭東宮御用掛に累遷し貴族院議員に勅選し文學博士の稱號を授けられ學士會員に列す漢文學の大家として中外に尊敬せらる明治二十九年二月一日正四位勳

四等を以て終ふ病革るや特に御物を賜ひ宮中顧問官に任せられ從三位に陞さる

クメ　モトブミ　**久米幹文**は國學者なり通稱孝三郎字は公斐水屋又桑園と號す文政十一年十月二十日水戸浮草町の家に生る藩の世臣石河幹忠の第三子にして同藩士久米博愼の嗣となる少より穎敏讀書を好む平田氏の門に入り古典を專修し又本居內遠の門にも遊べり烈公の知遇を受け職を以て小石川邸に在り力を國事に竭す公薨ずるに及び忌諱に觸れて幽閉せられ危難を經て屈せず明治五年敎部省に徵され相摸寒川神社讃岐田村神社飛驒水無神社阿波大麻比古神社等の宮司に歷任し七年十二月皇大神宮權禰宜に轉じ權少敎正を兼ぬ神宮敎會の爲に盡力し徒を結ぶこと三十萬に及ぶ十五年六月東京大學の聘に應じて講師となり尋て第一高等學校敎授となり國文國史の學を講ず人と爲り純潔、敬神愛國の情甚厚し又好く後進を誘掖し苟も一能ある者は薦引具に至る時に或は人の爲に欺かるれども意と爲さずして曰く吾は唯我誠を盡すのみと尤も歌文に秀で大家と稱せらる其風勁拔にして氣力あり漢文の骨格を採て以て其文に資したるの故なるべし嘗て國文の國史なきを憂ひ大八洲史を著はす又大鏡神皇正統記等を校訂し日本文粟を編する等有益の著多し兼て書を能くし刻印圓碁等の技に達せり二十七年十一月十日駒込西片町の宅に歿す年六十七染井に葬る友人其遺稿を集めて水屋集と云ふ（內藤耻叟撰墓誌、水屋集、居物翁撰碑、水屋集）

ゴトウ　ショウブム　**後藤昌文**は醫師なり癩病を治するに巧なり布哇國癩者多し同國政府其の名を聞て之を聘す頗る功あり名聲大に揚る歸朝の後明治二十八年歿す

コナカムラ　キヨノリ　**小中村清矩**は文學者なり姓は紀、陽春廬と號す幼名榮之助後金四郎又金右衛門と呼び後更に將曹と稱す三河國碧海郡西端村の人原田次郎八の子、三才にして父を亡ひ尋で母を喪す從母小中村氏の家に育せらる養父金右衛門春矩之を養ふ家商を業とす清矩學を好み之を喜ばず元と西島蘭溪に就て漢籍を學ぶ後我邦の古書を讀みて意を制度法律に潛め又國史を攻究す龜田鵬谷、伊能穎則又一時之が師となる後又本居內遠に從ふ安政四年紀侯に召され藩學の敎授となる後又本居內遠に從ふ安政四年紀侯に召され藩學の敎授となる尋て幕府に召され和學所の講師たり王政維新の後太政官に召され制度取調の命を受け二官八省の官制組織より御即位大祀の式禮等を調査して上る明治二年大學中助敎となり神祇權大史に轉じ四年大史に陞る神祇省大錄より敎部大錄に遷り內務省社寺局御用掛に轉ず後東京大學囑託敎師兼修史館御用掛となる十五年大學敎授となり法科及び文科を擔當す東京學士會員に列し文學博士の號を賜ふ二十三年貴族院議員に勅選せられ從五位勳六等に敘し瑞寶章を賜ふ二十五年五月七十の賀宴を開く和漢洋の學士文人雜伎俳優に至るまで來り集る二十八年十月十日病篤し特旨正五位に敘す十一日年七十四を以て歿す谷中墓地に埋葬す著す所令義解疏證、公廨備考、類聚國史續貂、止戈類纂等數種あり

スエヒロ　シゲヤス　**末廣重恭**は新聞記者なり伊豫宇和島の人幼にして藩黌に學ぶ明治元年藩黌の敎授となり翌年東京に出て林鶴梁の門に入る幾ならずして京都に赴き春日潛庵に從遊す廢藩置縣の事あるに及び國に歸りて神山縣及び愛媛縣に歷職し八年に至り職を辭して東京に來り大藏省の吏と爲る沈翰志を得ず竊かに時運の嚮ふ所を察し言論を以て一世を風動せんと欲し冠を掛けて曙新聞社に入り更に朝野新聞社に轉じ議論橫縱操觚社會推して盟主と爲す文章禍を買ふて條例の問ふ所となり獄に下るもの前後二回自由黨の起るに及び入りて其常議員と爲りしも議合はず馬場大石等の諸士と共に獨立黨を組織す二十一年歐米に漫遊し年を越えて歸り東京公論に入り再び筆を揮ひ大同派の爲に周旋する所あり爾來大同新聞に國會に文柄を執り民論を鼓吹する終始一日の如し二十三年議會の創めて開くるや其鄉里より選ばれて代議士と爲り

改選の事あるに及ひ不幸にして失敗し飄然筆を載せて朝鮮を經浦鹽須德に遊び東亞の形勢を視察する所あり歸來書を著して東洋の政策を論ず二十七年總選擧に再び擧げられて議會に入り自主的外政責任內閣の二大主義を確持して民間黨の爲めに奔走甚だ力むこの前後より社勞漸く痼疾を成し彌留痊えず而かも猶力めて國事に執掌し彈劾的上奏案の議に上りしときの如き大學病院に在りしも病を輿して議場に出席せり二十九年二月五日歿す年四十九少うして豪放快達晚年に及んで痛く自から撙節し重厚勤勉交友推して長者と爲す政事を論議するの旁ら好んで小說を著はす雪中梅、花間鶯、戰後の日本の如き皆世に行はる

セキヤ　キヨカゲ　**關谷清景**は理學者なり美濃大垣の人初め鉉太郎と稱す大垣藩士甚助の子明治三年藩の撰を以て大學南校に入り機械工學を專修し三年業を卒へて英國に留學し倫敦大學校に入る已にして肺患に罹り醫師の勸に依りて十年歸朝し病を療す稍〻癒るに及んで師範學校の御用掛となり十三年大學の屬敎授となり助敎より十九年三月理科敎授に任ず校に在るや敎師ユウヰング及びミルンと共に地震の理を研究し大に其理を曉る二十一年盤梯山の噴火するや病を佐けて菊地安と馳て之に趣き報告を作りて學者の參考に供す二十二年七月熊本に大震あるや又病を輿して趣かんと請ふ官許さず固く請ふて往く命を終るの後病篤し長崎に轉じて療養を行ふ翌年四月非職となる二十四年八月博士となり二十六年復び職に任ず病復又篤く二十九年一月九日神戸の療地に歿す是日偶〻地大に震ふ年四十二同市外禪昌寺に葬る地震に關する論說報告多く東洋學藝雜誌に揭ぐ

タムバ　ツチモト　**丹波經基**は朝廷の醫官なり典藥頭、權侍醫、女醫博士、施藥院使、兼右兵衛佐、圖書頭を歷る文治二年右大將藤原良通瘧を患ふ經基桂心湯を作り疾の發作に臨みて之を服せしむ又た附子散を以て背に傅て癒ゆ（皇國名醫傳）

タムバ　ツチヤス　**丹波經康**は朝廷の醫官なり鍼博士、侍醫、兼大舍人頭、主稅助近江掾等に歷任す正平中法王發背を患ふ經康之を治して殊功あり其の封丹波野田莊を分ちて之を賜ふ子雅長侍醫兼越前權介參河介等を歷る（皇國名醫傳）

ドクヨム　**獨園**は禪僧なり京師相國寺派管長にして退耕庵と稱す姓は荻野諱は承珠、獨園は其の號なり岡山縣備前國兒島郡山坂村の人文政二年六月を以て生る少時帆足萬里の門に遊び漢學を修め後ち禪に歸す維新の際排佛の議大に起るや師屹然として世の風潮に抗し百難を冒して法燈を將に滅せんとするに維持せり後ち洛北相國寺に住するに及び諸國の雲衲來りて參禪する者常に禪堂に滿つ師また相國寺內に居士林を設け居士の參禪を許す是に於て文人學士の來りて參禪する者多く宗風大に振ふ明治二十八年八月十二日歿す年七十七著はす所退耕錄、近世禪林僧寶傳等あり

ハシイチ　**橋市**は漆工なり姓は橋本名は市藏、初市三郎と云ふ鞘師又次郎の子芝新錢座に住す年若くして放蕩にして無賴なり年二十二にして行を悛め心を職業に用ふ巧に漆を以て植物菓蓏の摸造をなす殊に竹の摸造途を巧にし毫も眞の竹と異なるなし內外國の博覽會に賞牌を得ること多く明治十五年二月四日歿す年六十六弟子嗣ぐ二世橋市と云ふ

ヤマダ　アキヨシ　**山田顯義**は周防山口の人なり世〻毛利侯に仕ふ父は顯行と曰ふ藩の士班たり顯義少にして學を好み兵事に精し維新の際藩師に隊將として東北の諸藩を征す年猶ほ壯なれども兵を用ふると神の如し陞進して陸軍中將に至る又司法省に出仕し法律に通ず法典を制するに與て力あり大臣に至り正二位勳一等伯爵に敘す明治二十四年疾を以て辭す樞密顧問官議定官は故の如し二十五年鄉里山口に歸省して病を療す歸京の途生野銀山に抵り山中に在て遽に卒倒して起たず時に十一月十四日なり年四十九謚國寺に葬る

ヤマヲ　ノブナリ　**山根信成**は陸軍少將なり長州藩の人

軍功を以て累進して陸軍少將に至り近衛歩兵第二旅團長たり明治二十八年臺灣の我が國に屬するや徐賊を勦するの命を奉じ總督能久親王に從て諸所に轉戰す九月廿九日彰化府に進むや遇〻惡疫の犯す所となりて歿す年四十四歳十一ヶ月

ヨシカハ タイジラウ 吉川泰二郎は郵船會社の社長なり和歌山の人實は舊奈良の神官の家に生る父某夙に歿す幼學聞く所なし慶應年間十五歳にして初めて江戸に出で幕府の軍艦奉行木下某の家塾に入る居ること二年にして維新の亂に遭ひ師木下氏總野の間に脱走し屢〻官軍の追跡する處となる泰二之に從つて備さに艱苦を嘗む後脱して江戸に入り友人大坂の人山口良齋等に依り初めて福澤諭吉に見え新錢座なる慶應義塾に入る當時清貧洗ふが如く數圓の入社金に窮し情を述べて假貸を乞ふ故に慶應義塾の入社簿今に於て泰二の姓名を逸脱すと云ふ明治二年松山棟菴に隨て初めて和歌山に到り其の家塾共立學舍に入り松山氏を助けて子弟に英學を授く此時母及弟妹を迎へて共に小松恒太郎の邸内に僑居す其の親友家族多く和歌山に在るの故を以て遂に籍を和歌山に移す明治三年再び東京に出て又慶應義塾に入る同五年弘前の英學校(後の東奥義塾)の聘に應じ居る期年にして職を辭す同六年文部省九等出仕に補し尋で八等出仕に進む八年愛知縣英語學校長に補し後宮城師範學校長に遷る十一年十月郵便濠船三菱會社に入り幾ならず横濱支店支配人と爲り尋で東京店支配人神戸支社支配人に移る同十八年九月三菱會社を廢し日本郵船會社に合するや同會社に轉じ大坂支配人兼神戸支店支配人となり理事副社長取締を歴て二十七年三月社長に選まる偶〻日清戰爭起り船舶の運轉極めて繁忙なり能く事務を料理し兵員糧餉の運送等を盡せしを以て二十八年五月特旨を以て位記を賜ひ從五位に叙せられ十一月勳三等金千圓を賜ふ又佐久間貞一と吉佐移民會社を創設し濠洲移民の緒を開く其の他民間事業その名を列するもの多し近年肺患に罹り醫師其の靜養を勸む然れども征清の役社業忙劇病床に在り病を勤めて事を視る十一月初旬疾俄に革り同十三日終に卒す享年四十五

ヨシヒサ シムワウ 能久親王は北白川宮と稱す初め滿宮と稱し俗に上野宮又輪王寺宮と稱す伏見邦家親王の第九子にして小松彰仁親王の弟なり仁孝天皇の養子となり青蓮院の法嗣に充て後梶井宮の法嗣となる安政五年年十二江戸に下り東台に入り輪王寺宮の附弟となり尋で親王となり名を能久と賜ひ入寺得度す尋で輪王寺宮を嗣き名を公現と改む萬延元年二品に叙し元治元年一品に昇る性活潑にして經籍を事とせず武技遊嬉を好む侍臣切に之を諫む乃ち節を屈して佛典を勵精す一を聞て十を知る慶應三年德川慶喜大政を奉還す幕府の士之に服せず將に兵を擧て親王を擁し德川氏の業を恢復せんと謀る執法覺王院之に與す即ち幕府の士彰義隊と稱する者の爲に擁せられ上野東叡山に據る已にして隊兵亂れて山危し覺王院親王を奉じて會津に奔らんと欲し五月十一日雨中間路を取りて彈丸を侵して逃る終に流涙して仙臺に至る此の時仙臺藩終に踰順を表す覺王院等亦成すべきなし親王乃ち相馬口の總督四條隆謌の陣に投じ七月十二日護送せられて十一月三日千住に着す熾仁親王に謁して罪を請ひ併せて慶喜の爲に宥恕を請ふ十二月十九日京師に護送せられ謹慎閉居す亂平ぐに及び親王の年少なるを以て明年終に罪を釋し位記を停め伏見宮に復歸す三年海に航して孛國に到り兵學を修む此に至て復たび宮と稱するを許され五年三品に叙し智成親王の後を承けて北白川宮と稱する七年陸軍歩兵少佐に任じ十年歐洲より歸る勳一等に叙し二品に進み中佐に陞る大佐を經て戸山學校次長に補す尋で敎頭に轉ず十七年少將に叙し歩兵第十一旅團長となり熊本に在り十九年大勳位に叙し二十五年中將に進み第六師團長となる猶ほ熊本に在り明年第四師團長に轉じ大坂に駐在す二十八年一月近衛師團長に遷り兵を率ゐて臺灣に航す臺灣は日清戰爭の結果新たに我が屬地となりしもの然るに人民猶ほ

王化に服せず舊政府を懷ふて我が師に背く殊に賊劉永福なるもの匪徒を煽動し勢猖獗を窮む親王臺北の近傍洩底の地に上陸し漸く南進して賊を討す親王兵士と寢食を共にし梅風沐雨備さに困難を嘗む是を以て兵氣大に振ひ向ふ所敵なし時恰も暑熱に際し殊に蕃地氣候の不良に會す親王瘴毒に觸る然れども未だ事を廢せず日に疾を冒ふて作戰を指揮す左右猶ほ其の篤なるに至るまで親王の疾あるを知らず已にして將に臺南を攻め賊將を虜せんと欲し十月二十二日兵を進めて途を發す途にして薨ず二十八日骸を軍艦に搭して東京に入る尚ほ存生の禮を用ふ十一月一日詔して菊花章首飾と幷びに功三級金瑪勳章を賜ひ陸軍大將に陞す五日喪を發す國葬を以て豐島岡に葬る朝野痛歎せざるなし親王學に精く諸藝に通ず人となり溫恭寛弘賢を尚び人を愛す衆人の景慕する所となり凡そ文武工藝の諸會謌ふて其の會長となす薨する年四十九

大日本人名辭書補遺 終

大日本人名辭書跋

古人言。作史。才識學三者不具則不可。然徒懼才識學之不具。拱手逡巡。是終無著作也。世有人名辭書者。所臚列各種名家之傳記。而便於人之參考也。此書泰西多行。而獨本邦未見有之。我社窃以爲憂。於是田口鼎軒首唱編纂之擧。他社員和之。遂不顧僭踰。相謀從事鉛槧。自正史實錄日記。以至野乘小說口碑。苟可據者。會蒐參酌成一書。名曰大日本人名辭書。其爲書也大册四。其爲字也凡四百萬。其爲傳也無慮二萬五千有餘。其業之難。或不遠下於大日本史乎。夫大日本史者。

水戸義公以藩力殆網羅天下學士。而迨其成。猶經一百年許。今此書則終始預編纂者僅數名。而大成之期不過一年有半。則紬繹淘汰固有未如意者。而紕繆漏脫亦當不免。然私謂本邦傳記之書。雖多則多矣。而其所記悉止於一種一類人。未有錯綜諸種人集大成之者。集大成之。則創於此書。學者苟資以供搜索之用。不無裨補於萬一歟。若夫補不足。訂所誤。以爲完良之書。則世自有其人。我等不復敢任而可也。

明治十九年四月

嵯峨正作識

大日本人名辭書再版跋

田口鼎軒膽識之士也。夙講濟世之學。著書殆等身。就中泰西政事類典。人名辭書。社會事彙等。卷帙浩瀚。古今無比。其費亦不貲。所得不足以贖所失。辭書前版既罄。而世多求之者。於是乎更起補訂再刊之業。余之寡陋。嚮以參事彙編纂之事。復從事于斯。兀々祇筆。三閱月而卒業。嗚呼世間僥倖躁進之徒。耽々逐々。以趨勢利。叨貪榮名。然如其人與名。則徒屬烟荒草腐耳。如鼎軒則不然。屹然在草莽。刊行經濟雜誌。以論濟世之道。又著述有用之書。以對昭代之恩。其間雖遇世路艱難。

商運衰頹。致顛躓困阨而不顧。以行其志。自非氣魄豪壯。識量宏遠者。焉能至之哉。書成。徵余一言。一朝早起。對案呼卯酒。引滿數爵。遂執毫題于卷末云。

明治廿四年冬十一月上浣　春山　川上廣樹

大日本人名辭書第一版の卷末に書す

一大日本人名辭書編纂の業愈〻本月を以て終を告げたるに付聊か其顛末を記して以て他日の參照に備ふべし初め此書編纂の事を企つるや世間は既に不景氣となりて泰西政事類典發兌の時とは大に事情を異にせり去れは持重の方法を守らんには決して斯る大業を企つべきにあらざれども兼て此書なきが爲に不自由を感したること少なからざりしを以て敢て其編纂に着手し能く成就したるは意外の幸と云ふべし而して此書編纂に關して專ら事に任せしは社員嵯峨正作東條源次郎高橋兼宮川仁吉の四氏也嵯峨氏は此書に揭くべき凡ての傳記を蒐め漢文は之を譯し他人の譯稿及ひ和文傳記は之を校したり東條氏は初め專ら反譯に任し漢文の書は半は氏の反譯に係れり後印刷の校合に任し初稿は凡て氏の校合する所なり高橋氏は姓名の順序を立て假名の誤謬を正し宮川氏は印刷の再校を檢し且つ許多の漢文を反譯せり固より緩急相應したるは辯を要せずと雖も大要は右の如くなりき然り而して別に森貞次郎氏あり氏は初め自ら此企あり我社の此舉あるを聞き公務の餘を以て俱に此事に任し遺漏を補ひ編纂を助けられたり其餘石川暎作伴直之助關輪正路三木實田部全次郎野中眞等の諸氏あり或は反譯を助け或は校正校合を助けられたり蓋し前後此編纂に關係せる人員を舉くれば決して之に止まらずと雖ども其勞の多きは以上の諸氏なりとす

一此書成りて而して之を反讀するに粗雜誤謬少なからす是れ亦た一言の辯なかるべからず蓋し此書編纂の間は我社に於て不幸の最も紛起したる時なりき第一社員石川暎作氏は昨年八月より肺病に罹りて本月に至り終に死去せり第二嵯峨氏の細君は久しく病蓐に臥し昨年十二月を以て終に死去し嵯峨氏も亦た身躰不隨意となれり第三宮川仁吉氏の父も亦た其鄉里に於て死去せり第

四余が家に於ても祖母荆妻二人の死あり此等の爲に兼て割當たる事業を期限内に行ふを得ずして狼狽を極めたり而して第一卷の時に當りて是の事最も甚しかりき然れども幸に雜誌に關しては乘竹孝太郎氏十分に之に任し辭書に於ては嵯峨氏亦た病に屈せず筆を執り諸務に至りては堅月二郎氏之を總理して周到なりしが爲に第二卷以後に至りては誤謬大に減せり蓋し此等の凶事を述ふるは余の欲する所にあらずと雖も他日此書を校補するものあらは具に其疎漏を見ん故に擔任諸氏に代り一言辯せざるを得ざるなり

一此書發兌の後江湖の賞贊を蒙むる極めて多し私に歡喜に堪へざるなり唯〻其順序をイロハ順となさずして五十音の順となせしに付ては反對の批評を蒙むると少なからず故に是亦た一言の辯なかるべからず抑も此書に五十音の順を用ひし所以は二箇の理由あり第一五十音に於ては僅にアカサタナハマヤラワの十字の順を記憶せは可なりと雖もイロハ順に於ては四十八字の順を悉く記憶せされは索引するを得ず是れ第一の理由なり第二今日に於ては右十字の順よりは寧ろイロハ四十八字の順を記憶するもの多かるべけれども他日小學生徒成長するに至らば右十字の順を便とするもの却て多かるべし是れ第二の理由なり此二事を思慮して余輩はイロハ順を用ひずして五十音の順を用ひたり

一此書明治十七年十二月を以て着手し本年本月を以て期を違へず竣功せり其間月を閲する僅に十有八ヶ月のみ是れ素より先人の遺書ありて勞を要する少きに因ると雖も擔當諸氏の勉勵に至りては實に非常なるものありき諸氏皆な云ふ今日より當時を回顧すれば恰も身一大戰爭中に在るの懐ありと眞に其言の如し今や此戰地を出て〻樂土に入れり其喜知るべきなり即ち其事情を記して卷末に附すと云ふ

明治十九年四月

田口卯吉誌す

大日本人名辭書再版の卷末に書す

此書前版已に鬻盡し因て近年其價大に騰貴し坊間にては三十圓内外にて賣買するものあるに至れりとか是に於て本社更に再版の擧を企て本月を以て竣功を告くるを得たり

前版に於ては成功を急きたれば專ら世間流布の書に就いて傳記を求めたり故に著名の人物にして採蒐に漏れたるもの頗る多かりき然るに此回は左の諸君大に此擧を贊成せられ材料を給せられたり

一成齋重野先生は數多の秘書の謄寫を許されたり

一香亭中根先生は近世の名家にして未だ傳記の世に存ぜざるもの數十名の傳を記し之を贈られたり

一華陽乙骨先生及竹里吉田先生共に其亡友故人數名の傳を贈られたり

一石川二三造君は碧人傳を寄贈せられたり

其餘各方より寄贈の傳記行狀等少なからす故に之を前版に比するに總計五百餘名の增加を爲せり

其出所皆な各傳記の末に詳かなり

今ま此版を以て前版に比するに前版は大に劣れり余は偏に前版の豫約者並に購買者諸君が我社を

前版は別ちて四綴とせり故に亡友嵯峨氏の跋文中大冊四の語あり今ま改めて二綴となせり

此回の出版に就いては川上廣樹氏は專ら補訂に任し安西恭士氏は專ら漢文を和譯し高橋兼及竹花

泰助の兩氏は校合に任し望月二郎氏は諸務を總理せるものとす其餘友人の補助を得たると少なからず今一々記載せず八月を以て起業し本月を以て竣工す其間僅に四ヶ月のみ

明治廿四年十一月上澣　　田口卯吉誌す、

大日本人名辭書第三版の後に書す

此書第一版は明治十九年に刊行せしが五年を經て二十四年に賣り盡し其の十一月に至りて再版を行へり而して第貳版は其の印刷數の多かりしにも拘はらず四年に至らずして賣盡しゝは世間が此書の有用なることを認めたるに依るべし爰に昨二十八年復又豫約を募りて第三版に着手せしが豫約者の數九百六十七人あり第一版は其數二百四十一人あり第二版は二百七十二人なりしに比して實に非常の增加と云ふべし

前版尙ほ脫漏誤謬ありしを以て此際大に訂正增補を加へたり前版に重複若くは不用の傳ありしを除去せしも猶ほ傳記の增したることは通計千六七百人に下らず

其增補に付きて力を假されし諸君は

中根　淑君　川上　廣樹君　金井　知義君　西村　兼文君
横瀨　貞君　石川二三造君　文學士大森金五郎君　文學士神谷　四郎君
大野　豐太君　田沼小右衛門君

其他頗る多し大野君は俳人の傳記及び系圖を寄贈せられ田沼君は狂歌師の傳記を供給せられたり大森神谷の二君は初め別名字書とも名つくべきものを編輯して將に出版せんと企てられしが人名辭書の再版の廣告を見て余に告ぐるに之を辭書に編入するの利益あるべきを以てせられたり依て

辭書の印刷着手に際せるにも拘らず遽かに之を編入することゝなし兩君に請ふに別名の寄送を以てしたり

而して從來の如く別名彙纂として辭書の卷首に附するときは覽者本文に於て其の求むる所の人の傳記を發見せざる時初めて別名彙纂に立戻りて之を索め而して後其の傳の所在を知るが如き無用の煩を要するが故に今回は之を本文に挿むことゝなしぬ

八千有餘の別名を本文中適當の位置に收め且辭書の何れの部分に其の傳を掲げあるやを指示すの事業は意外の時間を要せり本書の出版期限に後れしも一は活版所の過忙に依りしと雖も一は此の勞の爲なりき

森貞二郎君は前版の誤謬を訂し及び原稿の編成を督し且通篇の校正を擔當したり校正の際第一版以來因襲の誤植を發見し之を校訂したる所實に夥しと云ふ要するに本版の大に前版に勝る所以のもの君が力を多しとなす

本版業を昨二十八年四月に起し本月に至りて刷成せり

明治二十九年二月　　田口卯吉誌す

明治十八年十月五日出版御届
明治十九年四月初版
明治廿四年十一月十四日訂正增補印刷
明治廿四年十一月廿一日再版
明治廿九年二月十五日再訂正增補印刷
明治廿九年二月廿九日三版發行

定價金拾貳圓

版權所有

著作兼發行者　東京市京橋區彌左衛門町七番地　合名會社　經濟雜誌社
右代表者社員　東京市麹町區一番町二十七番地　望月一郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍々員　山本鉄次郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社　秀英舍
發行所　東京市京橋區彌左衛門町七番地　合名會社　經濟雜誌社

年號時代早見表

凡例

此表は年號の時代を示す爲に製せしものなり故に本文を讀み年號を見て其時代を知らんと欲せは此表を參照すべし然るときは其紀元々年よりより何年に當るやを詳にするのみならず兼て當時の天皇若くは將軍を知るを得べきなり

年號	紀元	年間	帝名	將軍名
無年號	從一	七六	神武	
同	八〇	一二	綏靖	
同	一一三	一三	綏靖	
同	一五〇	三八	安寧	
同	一八五	三五	懿德	
同	二〇六	八三	孝昭	
同	二六九	一〇一	孝安	
同	三七〇	七六	孝靈	
同	四四六	五七	孝元	
同	五〇三	五六	開化	
同	五五四	六一	崇神	
同	六三一	九八	崇神	
同	六六〇	一〇六	垂仁	
同	七三一	九九	垂仁	
同	七九〇	六〇	景行	
同	八五〇	六〇	成務	
同	八六〇	九	仲哀	
同	八六一	六九	神功皇后	
同	九二九	四一	應神	
同	九七〇	八七	仁德	
同	一〇六〇	六	反正	
同	一〇七一	四二	允恭	
同	一一四	三	安康	
同	一一六	三	雄略	
同	一一三九	五	清寧	
同	一一四四	三	顯宗	
同	一一四七	一	仁賢	
同	一一四八	八	武烈	
同	一一五六	二五	繼體	
同	一一六七	二	安閑	
同	一一九六	二	宣化	
同	一二〇〇	三	欽明	
同	一二〇三	一四	敏達	
同	一二〇四	二	用明	
同	一二〇八	三	崇峻	
同	一二一三	三	推古	
同	一二一九	一三	舒明	
同	一二二九	三	皇極	
白雉	一三〇	五	孝德	
無年號	一三一	三	天弘天皇	
	一三四五	三	天智	
			天武	
			文武	
			持統	
			文武	
			元明	
			元正	
			聖武	
			孝謙	
			淳仁	
			稱德	
			光仁	
			桓武	
			平城	
			嵯峨	
			淳和	
			仁明	
			文德	
			清和	
			陽成	
			光孝	
			宇多	
			醍醐	
			朱雀	
			村上	
			冷泉	
			圓融	
			花山	
			一條	
			三條	
			後一條	
			後朱雀	
			後冷泉	
			後三條	
			白河	
			堀河	
			鳥羽	
			崇德	
			近衛	
			後白河	
			二條	
			六條	
			高倉	
			安德	
			後鳥羽	
			土御門	
			順德	
			後堀河	
			四條	
			後嵯峨	
			後深草	
			龜山	
			後宇多	
			後二條	
			後伏見	
			伏見	
			後醍醐	
			花園	
			光嚴	
			後醍醐	
			後村上	
			後龜山	
			後小松	
			後圓融	
			後小松	
			後花園	
			後土御門	
			後柏原	
			後奈良	
			正親町	
			後陽成	
			後水尾	
			後光明	
			後四條	
			後櫻町	
			後桃園	
			後櫻町	
			中御門	
			東山	
			櫻町	
			桃園	
			後醍醐	
			光嚴	
			光格	
			仁孝	
			孝明	
			今上天皇	

年號	紀元	年間	帝名	將軍名
永承	從一七六	七	後醍醐	
天喜	一七〇六	一	後醍醐	
同	一七一二	五	後冷泉	
康平	一七一八	七	後冷泉	
同	一七二四	四	後冷泉	
治暦	一七二八	三	後冷泉	
同	一七三二	五	後三條	
延久	一七三七	四	後三條	
承保	一七三九	二	後三條	
同	一七四二	二	後三條	
承暦	一七四四	三	後三條	
同	一七四七	四	後三條	
永保	一七四一	一	後三條	
應德	一七四四	三	後三條	
寛治	一七四七	七	後三條	
嘉保	一七五四	二	後三條	
同	一七五五	一	後三條	
永長	一七五六	二	後三條	
承德	一七五八	二	後三條	
康和	一七五九	五	後三條	
長治	一七六二	二	後三條	
嘉承	一七六六	二	後三條	
同	一七六七	一	後三條	
天仁	一七六八	二	後三條	
同	一七六九	一	後三條	
天永	一七七〇	二	後三條	
同	一七七一	一	後三條	
永久	一七七二	二	後三條	
同	一七七三	一	後三條	
元永	一七七四	二	後三條	
同	一七七五	一	後三條	
保安	一七七六	二	後三條	
同	一七七八	一	後三條	
天治	一七七九	二	後三條	
大治	一七八四	五	後三條	
同	一七八五	一	後三條	
天承	一七八六	二	後三條	
同	一七八七	一	後三條	
長承	一七八八	二	後三條	
同	一七八九	一	後三條	
保延	一七九五	七	後三條	
同	一八〇〇	二	後三條	
永治	一八〇一	二	後三條	
康治	一八〇二	二	後三條	
天養	一八〇四	二	後三條	
同	一八〇五	一	後三條	
仁平	一八〇一	三	後三條	
久安	一八〇五	六	後三條	
同	一八〇六	一	後三條	
仁安	一八〇六	二	後三條	
同	一八〇八	二	後三條	
永萬	一八〇九	一	後三條	
同	一八〇九	二	後三條	
嘉應	一八一〇	二	後三條	
同	一八一一	二	後三條	
承安	一八一二	五	後三條	
同	一八一七	二	後三條	
安元	一八一八	二	後三條	
同	一八一九	一	後三條	
治承	一八二五	六	後三條	
同	一八二六	一	後三條	
養和	一八二一	一	後三條	
同	一八二一	一	後三條	
寿永	一八二二	二	後三條	
同	一八二三	二	後三條	
元暦	一八二四	二	後三條	
同	一八二四	一	後三條	
文治	一八二五	五	後三條	
同	一八二五	一	後三條	
建久	一八二五	一	後三條	
同	一八二八	一	後三條	
同	一八二九	一	後三條	
正治	一八二九	二	後三條	
建仁	一八三一	三	後三條	
元久	一八三四	一	後三條	
同	一八三五	一	後三條	
建永	一八三六	二	後三條	
同	一八三七	一	後三條	
承元	一八三七	四	後三條	
同	一八三八	一	後三條	
建暦	一八三九	二	後三條	
同	一八四一	一	後三條	
建保	一八四三	七	後三條	
同	一八四六	二	後三條	
承久	一八四七	一	後三條	
同	一八四八	一	後三條	
貞應	一八四九	二	後三條	
同	一八五〇	一	後三條	
元仁	一八五一	一	後三條	
同	一八五二	一	後三條	
嘉禄	一八五三	二	後三條	
同	一八五四	一	後三條	
安貞	一八五四	二	後三條	
同	一八五五	一	後三條	
寛喜	一八五六	二	後三條	
同	一八五七	一	後三條	
貞永	一八五七	二	後三條	
同	一八五八	一	後三條	
天福	一八五八	一	後三條	
文暦	一八五九	二	後三條	
同	一八五九	一	後三條	
嘉禎	一八六〇	二	後三條	
同	一八六一	二	後三條	
暦仁	一八六一	一	後三條	
同	一八六二	一	後三條	
延應	一八六二	二	後三條	
同	一八六三	一	後三條	
仁治	一八六三	三	後三條	
同	一八六四	一	後三條	
寛元	一八六四	二	後三條	
同	一八六五	一	後三條	
宝治	一八六七	二	後三條	
同	一八六八	一	後三條	
建長	一八六九	二	後三條	
同	一八七一	一	後三條	
康元	一八七六	二	後三條	
同	一八七六	一	後三條	
正嘉	一八七七	二	後三條	
同	一八七八	一	後三條	
正元	一八七八	二	後三條	
同	一八七九	一	後三條	
文応	一八七九	二	後三條	
同	一八七九	一	後三條	
弘長	一八八一	二	後三條	
同	一八八二	一	後三條	
文永	一八八二	一	後三條	
同	一八八三	一	後三條	
建治	一八八三	二	後三條	
同	一八八四	一	後三條	
弘安	一八八四	二	後三條	
同	一八八五	一	後三條	
正応	一八八八	二	後三條	
同	一八八八	一	後三條	
永仁	一八八九	二	後三條	
同	一八九一	一	後三條	
正安	一八九二	二	後三條	
同	一八九三	一	後三條	
乾元	一八九四	二	後三條	
同	一八九五	一	後三條	
嘉元	一八九五	二	後三條	
同	一八九六	一	後三條	
徳治	一八九六	二	後三條	
延慶	一八九七	一	後三條	
同	一八九八	一	後三條	
応長	一八九八	二	後三條	
正和	一八九九	一	後三條	
文保	一九〇七	二	後三條	
同	一九〇七	一	後三條	
元応	一九〇八	二	後三條	
同	一九〇九	一	後三條	
元亨	一九一一	三	後三條	
同	一九一一	一	後三條	
正中	一九一二	二	後三條	
同	一九一四	一	後三條	
嘉暦	一九一六	二	後三條	
同	一九一七	一	後三條	
元徳	一九一九	二	後三條	
同	一九一九	一	後三條	
元弘	一九二一	二	後三條	
同	一九二一	一	後三條	
建武	一九二四	三	後三條	
同	一九二五	一	後三條	
暦応	一九二八	二	後三條	
同	一九二九	一	後三條	
康永	一九三二	三	後三條	
同	一九三三	一	後三條	
貞和	一九三五	二	後三條	
同	一九三六	一	後三條	
観応	一九三七	二	後三條	
同	一九三八	一	後三條	
文和	一九三八	二	後三條	
同	一九三九	一	後三條	
延文	一九三九	二	後三條	
同	一九四〇	一	後三條	
康安	一九四一	二	後三條	
同	一九四一	一	後三條	
貞治	一九四二	二	後三條	
同	一九四三	一	後三條	
応安	一九四三	二	後三條	
同	一九四四	一	後三條	
永和	一九四五	二	後三條	
同	一九四五	一	後三條	
康暦	一九四六	二	後三條	
同	一九四六	一	後三條	
永徳	一九四一	二	後三條	
同	一九四一	一	後三條	
至徳	一九四四	二	後三條	
同	一九四四	一	後三條	
嘉慶	一九四七	二	後三條	
同	一九四八	一	後三條	
康応	一九四九	二	後三條	
同	一九四九	一	後三條	
明徳	一九五〇	二	後三條	
同	一九五〇	一	後三條	
応永	一九五三	三	後三條	
同	一九五四	一	後三條	
正長	一九五八	二	後三條	
同	一九五八	一	後三條	
永享	一九五八	二	後三條	
同	一九五九	一	後三條	
嘉吉	一九五九	二	後三條	
同	一九六一	一	後三條	
文安	一九六一	二	後三條	
同	一九六二	一	後三條	
宝徳	一九六二	二	後三條	
同	一九六四	一	後三條	
享徳	一九六四	二	後三條	
同	一九六五	一	後三條	
康正	一九六五	二	後三條	
同	一九六六	一	後三條	
長禄	一九六七	二	後三條	
同	一九六八	一	後三條	
寛正	一九六八	二	後三條	
同	一九六九	一	後三條	
文正	一九六九	二	後三條	
同	一九七〇	一	後三條	
応仁	一九七〇	二	後三條	
同	一九七一	一	後三條	
文明	一九七一	二	後三條	
同	一九七二	一	後三條	
長享	一九七二	二	後三條	
同	一九七三	一	後三條	
延徳	一九七四	二	後三條	
同	一九七五	一	後三條	
明應	一九七五	二	後三條	
同	一九七六	一	後三條	
文亀	一九七六	二	後三條	
同	一九七七	一	後三條	
永正	一九七八	二	後三條	
同	一九七八	一	後三條	
大永	一九八一	二	後三條	
同	一九八二	一	後三條	
享禄	一九八八	二	後三條	
同	一九八九	一	後三條	
天文	一九八九	二	後三條	
同	一九九〇	一	後三條	
弘治	一九九〇	二	後三條	
同	一九九一	一	後三條	
永禄	一九九一	二	後三條	
同	一九九二	一	後三條	
元亀	一九九二	二	後三條	
同	一九九三	一	後三條	
天正	一九九三	二	後三條	
同	一九九四	一	後三條	
文禄	一九九四	二	後三條	
同	一九九五	一	後三條	
慶長	一九九五	二	後三條	
同	一九九六	一	後三條	
元和	一九九六	二	後三條	
同	一九九七	一	後三條	
寛永	一九九七	二	後三條	
同	一九九八	一	後三條	
正保	一九九八	二	後三條	
同	一九九九	一	後三條	
慶安	一九九九	二	後三條	
同	二〇〇〇	一	後三條	
承應	二〇〇一	二	後三條	
同	二〇〇二	一	後三條	
明暦	二〇〇二	二	後三條	
同	二〇〇三	一	後三條	
万治	二〇〇三	二	後三條	
同	二〇〇四	一	後三條	
寛文	二〇〇四	二	後三條	
同	二〇〇五	一	後三條	
延宝	二〇〇五	二	後三條	
同	二〇〇六	一	後三條	
天和	二〇〇六	二	後三條	
同	二〇〇七	一	後三條	
貞享	二〇〇七	二	後三條	
同	二〇〇八	一	後三條	
元禄	二〇〇八	二	後三條	
同	二〇〇九	一	後三條	
宝永	二〇〇九	二	後三條	
同	二〇一〇	一	後三條	
正徳	二〇一〇	二	後三條	
同	二〇一一	一	後三條	
享保	二〇一一	二	後三條	
同	二〇一二	一	後三條	
元文	二〇一六	二	後三條	
同	二〇一六	一	後三條	
寛保	二〇一七	二	後三條	
同	二〇一七	一	後三條	
延享	二〇一七	二	後三條	
同	二〇一八	一	後三條	
寛延	二〇一八	二	後三條	
同	二〇一九	一	後三條	
宝暦	二〇一九	二	後三條	
同	二〇二〇	一	後三條	
明和	二〇二〇	二	後三條	
同	二〇二一	一	後三條	
安永	二〇二一	二	後三條	
同	二〇二二	一	後三條	
天明	二〇二二	二	後三條	
同	二〇二三	一	後三條	
寛政	二〇二四	二	後三條	
同	二〇二四	一	後三條	
享和	二〇二四	二	後三條	
同	二〇二五	一	後三條	
文化	二〇二五	二	後三條	
同	二〇二六	一	後三條	
文政	二〇二六	二	後三條	
同	二〇二七	一	後三條	
天保	二〇二八	二	後三條	
同	二〇二九	一	後三條	
弘化	二〇二九	二	後三條	
同	二〇三〇	一	後三條	
嘉永	二〇三〇	二	後三條	
同	二〇三一	一	後三條	
安政	二〇三一	二	後三條	
同	二〇三二	一	後三條	
萬延	二〇三二	二	後三條	
同	二〇三三	一	後三條	
文久	二〇三三	二	後三條	
同	二〇三三	一	後三條	
元治	二〇三四	二	後三條	
同	二〇三四	一	後三條	
慶應	二〇三五	二	後三條	
同	二〇三五	一	後三條	
明治	二〇三六	二	後三條	

年號	紀元	年間	帝名	將軍名
延元	從一九六	一	後醍醐	
興國	一九九	一	後醍醐	
正平	二〇〇	六	後村上	
建德	二〇六	二	後村上	
文中	二〇七	二	後村上	
天授	二〇三	三	後龜山	
弘和	二〇四	三	後龜山	
元中	二〇四	九	後龜山	
北朝				
建武	一九九六	二	光明	
暦應	一九九八	四	光明	
康永	二〇〇二	三	光明	
貞和	二〇〇五	五	光明	
観應	二〇〇九	四	光明	
文和	二〇一一	二	崇光	
延文	二〇一六	五	崇光	
應和	二〇二一	五	崇光	
貞治	二〇二二	六	後光嚴	
應安	二〇二八	七	後光嚴	
永和	二〇三五	二	後圓融	
康暦	二〇三九	二	後圓融	
永德	二〇四一	三	後小松	
至德	二〇四四	三	後小松	
嘉慶	二〇四七	一	後小松	
康應	二〇四九	二	後小松	
明德	二〇五二	三	後小松	
応永	二〇五三	一	後小松	
正長	二〇八四	三	後小松	
永享	二〇八八	一	後小松	
嘉吉	二〇八九	一	後小松	
文安	二〇九四	三	後花園	
宝德	二〇九六	三	後花園	
享德	二〇九九	三	後花園	
康正	二一〇二	二	後花園	
長禄	二一〇七	二	後花園	
寛正	二一〇九	六	後花園	
文正	二一二六	二	後花園	
應仁	二一二七	一	後花園	
文明	二一二九	一	後花園	
長享	二一四七	二	後土御門	
延德	二一四九	二	後土御門	
明應	二一五二	二	後土御門	
文亀	二一六一	二	後土御門	
永正	二一六四	二	後土御門	
大永	二一八一	二	後土御門	
享禄	二一八八	二	後土御門	
天文	二一九二	二	後土御門	
弘治	二一九五	三	後奈良	
永禄	二一九八	三	後奈良	
元亀	二二〇〇	三	後奈良	
天正	二二〇三	二	後奈良	
文禄	二二〇五	二	後奈良	
慶長	二二〇九	一	後奈良	
元和	二二一五	九	後奈良	
寛永	二二二四	三	後奈良	
正保	二二四四	二	後奈良	
慶安	二二四八	二	後奈良	
承應	二二五二	一	後奈良	
明暦	二二五五	二	後奈良	
万治	二二五八	三	後奈良	
寛文	二二六一	一	後奈良	
延宝	二二七三	八	後奈良	
天和	二二八一	二	後奈良	
貞享	二二八四	二	後奈良	
元禄	二二八八	一六	後奈良	
宝永	二二一一	四	後奈良	
正徳	二二一五	二	後奈良	
享保	二二一六	二	後奈良	
元文	二二三六	二	後奈良	
寛保	二二四〇	二	後奈良	
延享	二二四四	二	後奈良	
寛延	二二四八	二	後奈良	
宝暦	二二五一	一	後奈良	
明和	二二六四	二	後奈良	
安永	二二七二	九	後奈良	
天明	二二八一	二	後奈良	
寛政	二二八九	一	後奈良	
享和	二二九一	二	後奈良	
文化	二二九四	一四	後奈良	
文政	二二一四	一四	後奈良	
天保	二二四四	一四	後奈良	
弘化	二二四四	二	後奈良	
嘉永	二二四八	六	後奈良	
安政	二二五一	六	後奈良	
萬延	二二五〇	一	後奈良	
文久	二二六一	三	後奈良	
元治	二二六四	二	後奈良	
慶應	二二六五	二	後奈良	
明治	二二六八	一	後奈良	

右表中紀元從七七三年間從八五一年間從九七二年間從一一九三年間は空位に付之を除く又年號白雉以後天智天武朝の間に白鳳朱雀の年號ありどの一説あれども其年代を詳にせず依て之を記せず

281.03
D17
k(2th)
Ⓜ

005552−002−7

281.03−D17k(2th)

大日本人名辞書

経済雑誌社／刊

2冊(下1607p)
M29

ACF−0935